

「Alikuja hapa kwa ajili ya biashara ya kahawa. Wapi Mama Yuko?」（コーヒーの取引に来たようだ。ママユウコはどこにいらっしゃいますか?）
女性が応えた。

「Mama Yuko hakuwa na kuwa hapa leo.」（ママユウコは今日はここには見えてない）

兵士が康介に向かって言った。

「Mtu kuwajibika si hapa.」（責任者は留守だ）

康介は尋ねた。

「Ni Mheshimiwa Barack hapa?」（バラックさんはいらっしゃいませんか?）

「Barack si hapa. Mama Yuko ni mwakilishi. Yeye hakuwa na kuwa hapa leo pia.」（バラックは居ない。ママユウコが総責任者だ。だが、ママユウコも今は居ない）

ふたりはそれ以上問い詰める訳にはいかなかった。諦めて帰ろうとしたときに一人の女性が声を掛けた。マリゼだった。

「あなたたち・・・ Kijapani, si wewe. Unatafuta Mama Yuko, si wewe?」（あなた達は日本人でしょう。ママユウコを探しているんじゃないの?）

康介が応えた。

「Ndiyo, sisi ni Jpanese. Jina langu ni Kashima. Yeye ni Uchimi. Tunataka kujadili kuhusu biashara ya kahawa pia.」（はい、そうです。わたしは鹿島、こちらは内観と申します。でもコーヒーの取引もお願いしたいのです）

「Hataki kukutana na Kijapani.」（彼女は日本人にはお会いにならないわ）

「Kwa nini?」（どうしてですか?）

「Yeye ni Mungu ambaye amekuja kwa Ruwanda kutoka Japan na kuokoa watu. Yeye si Kijapani sasa. Yeye hutuongoza.」（あの方はわたし達を救うために日本から、ルワンダにやって来た神様なの。もう日本人じゃないわ。あの方がわたし達を導いてくださっているのよ）

横に居た女性がマリゼを突いた。余計なことを喋るなどでも云う仕草だった。康介は言った。

「Tunataka kukutana na Mama Yuko kwa njia zote. Na, Sisi nataka kujadili

juu ya biashara na yake.」(ママユウコに是非会いたい。そして、取引の話をしたい)

それに対しては誰も応えなかった。兵士がふたりにこの場所を出るよう促した。ふたりは礼を言うと部屋から出た。建物の入り口とは反対側の先は広い空間になっているようだった。鹿島が兵士に向かって言った。

「Chumba mwishoni ni hospitali?」(この奥は病院ですか?)

「Ndiyo.」(そうだ)

「Naweza kuona huko?」(拝見させて頂けますか?)

「Nataka kwenda kwa ofisi ya kuuliza hivyo.」(事務所で聞いて来る)

兵士は直ぐにマリゼを連れて戻って来た。マリゼは黙って先頭に立って病室に向かった。賢は驚いた。そこはまるで野戦病院の看護病棟のようだった。およそ50人ほどの患者が所狭しと床に就いていて、看護婦達が負傷者の世話をしていた。賢はまた、即座にすべての看護婦を確認した。6人の看護婦が居たが、やはり東洋人は一人も居なかった。多くの患者は、まだ包帯に血の跡が付いていた。賢はその光景を頭に焼き付けた。マリゼに礼を言うとふたりは兵士に附いて車に戻った。車に乗り込むと、亜希子が言った。

「祐子お姉さまはいらっしゃいませんでしたか?」

賢は頭を横に振った。兵士に礼を言うと康介は直ぐに車を発進させた。帰りの車の中で賢は今見てきた光景を3人に説明した。梓が言った。

「それじゃあ、ママユウコが祐子さんかどうかまだ分からなかったのですね。」

「でも、看護婦と思われる女性が、「ママユウコはルワンダを助けるために、日本から来た神様だ」って言っていた。だから、祐子である可能性が高いと思う」

「祐子という名前は普通にある名前だから、まだそうかどうか分からないわ」

梓の慎重な言葉に対して亜希子が言った。

「いいえ、きっとママユウコは祐子お姉さまですわ。わたくしには分か

ります。神様のような方は滅多にいらっしやらないわ。誘拐船でも、皆が祐子お姉さまのことを神様だとおっしゃっていたでしょう。祐子お姉さまに間違いないわ」

道の状態がかなり悪くなってきている。ガタガタと揺られながら賢が言った。

「もしそうだとすると、会うのは至難の業だ。ママユウコは日本人には会わないと言っているらしい。なぜだ！ 理由が分からない」

自動車のエンジン音と、ガタガタ揺れる音のなかで、賢の言葉は空しく響いた。亜希子は黙ってしまった。そして暫くしてから独り言のようにぼつりと言った。

「何か訳があるのですわ。あのお優しい祐子お姉さまが、わたくしたちに会うのを拒むはずはありませんもの」

亜希子の声も騒音の中に埋もれてしまった。亜希子の意識は不安定になっていた。

「わたくしはずっと、人のために生きたいと思っていました。今もそう思っています。でも、どうしたら人のために働けるのか分かりませんでした。今日沢山の人の遺体を見ました。苦痛の中に命を失った人たち、その人たちを前にしても、わたくしは「愛している」と言うのが精一杯でした。なのに、祐子お姉さまは、ご自分が苦境の真ん中にいらっしやっても、ご自分のことを省みることなく、人びとのために生きていらっしやいます。祐子お姉さまは、よく、「わたしには人を助けることなんてできない」とおっしゃっていました。なのに、大勢の人たちをお救いになられています。一番愛していた方にお会いになることも拒否して、ルワンダの人たちの為に、いいえ、苦しんでいる人々のために生きておられます。わたくしはどうしたらよろしいのでしょうか？」

梓が言った。

「それは亜希子さんだけじゃないわ。わたくしたち、皆がそうよ。もし、あのママユウコが祐子さんだとしたら、わたくしは自分の生き方が恥ずかしくなります」

愛子も言った。「祐子さんて、すごい方だったんですね。賢パパのこと

をすごく愛していて、ただ賢パパを頼るだけの方だと思っていたのに、全然違ったんですね。わたし、びっくり」

「皆、祐子から金色の光が出ているのを知らないだろう。凄い光なんだ。目が開いていられないこともあるんだ。金色は慈悲の色だ。祐子の意識の底には慈悲のエネルギーが溢れているんだよ。心臓の辺りにあるアナハタチャクラが完全に開いているんだろう。僕らに真似のできないような、人の苦しみを感じ、救い出すことができるものすごい力を持っているんだと思う」

「ママユウコとおっしゃる方は祐子お姉さまに間違いありません」
ホテルに着いたのはまだ4時を少し廻った頃だった。一旦全員賢の部屋に集まり、翌日の相談をしてからホテルで食事をするようになった。5人が賢の部屋に入ると賢が亜希子を見て言った。

「亜希子、顔色が良くないが、どこか具合が悪いのか？」
「いいえ、わたくしはあの遺体を見てから、体の震えが止まりません。体中に悲しみが広がったような感覚がしています。それに、祐子お姉さまにもお会いできませんでしたし。ああ、わたくしはどうしたらいいのでしょうか？」

「亜希子、気をしっかり持てよ。今回の出張はまだ始まったばかりだ。これからどうやって祐子を探したらいいか、考えなくてはならないからな」

康介が言った。

「いずれにしても、まずはママユウコが祐子さんかどうかを確かめなくちゃなりませんね。何かいい方法はありませんかね」

梓が言った。

「亜希子さん、透視がおできになるでしょう。試してみませんか？」

「そうだ、亜希子、できるか？」

亜希子は了解して、椅子に座って透視を試みた。しかし、どうしても祐子の姿を捉えることはできなかった。

「駄目です。意識を集中させることができません。どうしても瞑想状態に入れないのです」

亜希子は悲しそうに言った。焦燥感に駆られているようだったが、焦れば焦るほど、瞑想から精神統一に移行するのが難しく感じられてきた。

そのとき、愛子が言った。

「賢パパ、賢パパ、見て、ボールよ、あのボール」

その言葉に、全員が愛子の指差す方向に注目した。いつの間にかボールが康介の腰掛けている椅子の手前のテーブルの上に載っている。

「どうして、ボールがここに帰って来たんだろう？」

賢は腰掛けていたベッドの縁から立ち上がると、テーブルのところに行ってボールを持ち上げてみた。全員立ち上がった。ボールは金色の光を放っている。賢は掌から腕に向けて電気が流れたような痺れを感じた。

そして、意識の奥に声が響いた。

「あなた、わたしよ。分かるかしら？あなたがわたしを探しに、ここまで来てくれたと連絡があったわ。ありがとう。とっとうれしくて、涙が流れるわ。あなたに会いたい。今すぐにもあなたの胸に飛び込んでゆきたい。そして、皆さんにもお会いしたい。でも、今はそれができないの。わたしはもう、以前のわたしじゃないわ。もう以前の自分には戻れないの。わたしには自分という意識が無くなったの。この人たちは悲惨よ。あのジェノサイドの後の苦しみの中に生きているの。わたしは皆と一緒にここを天国にするの。それまで、ここで生きるわ。どうか、わたしを探さないでね。あなたに会ったら、この人たちを見捨てることになってしまう。どうか、わたしを探さないで。お願い！」

賢の瞳に涙が浮かんた。4人は賢の顔を無言で見つめている。賢は瞑目しテレパシーで語り掛けた。ボールが薄水色に変化した。

「祐子、無事なんだな？お前が苦しみの中に自分自身を投げ込んで、周りの人々を導いているのが分かった。お前がそれほどまでに言うのなら、もうお前を探さない。だが、一つ教えてくれ。ママユウコというのはお前のことか？そこで、お前が何をしているのか教えてくれ。それから、俺たちに何かできることは無いのか？直ぐ近くまで来ているんだ。お前の為にできる限りのことをさせてほしい」

すぐに賢の脳裏に祐子の声が響いた。

「あなた、ありがとう。あなた、もしできるのなら、世界中の国々に、わたくしたちを救ってくれなくてもいいから、手を出さないでほしいと伝えてほしいわ。この人たちは、今は憎み合っているけど、元は心の優しい人たちだったの。いろいろな国の思惑で、この国は粉々になってしまったの。今、それを元に戻そうとしているの。世界の国々に対して、自分たちの国の繁栄のみを願って、他国を犠牲にしないで欲しいと伝えて欲しいの。あなたの教えてくれたように、愛に満ちた本来の意識に立ち戻って生きるように伝えてほしいの。自我に惑わされた覇気と欲望の心を捨てて欲しいと伝えて欲しいの。そうよ、わたしはママユウコと呼ばれているわ。わたしはここで看護婦の責任者をしているの。それと首長のサポートをしているわ。この身にブチ族の首長の子供を宿しているの。だから、あなたには会えないの。ごめんなさい」

賢は悲しさがこみ上げて来て、青色に変化したボールをテーブルの上に置くと、ポケットからハンカチを出して涙を拭った。全員がじっと賢を見つめていた。椅子から立ち上がり、一步退いて賢の姿を見つめていた康介が、ふとボールに貼り付けてある紙に気がついた。ビニールの袋を切り取ったような破片が貼り付けられていた。康介はボールを持ち上げ、上に翳した。

「ここに、何か書いたビニールが貼り付けてある。読んでみるよ・・・
・「わたしは元気です。わたしはもう以前の祐子ではありません。この国の人たちと生きることにしました。どうかわたしを探さないでください」・・・これは、祐子さんからだ・・・でも、どうしてこんなボールが・・・」

康介がボールをテーブルの上に戻すと、賢が涙を拭って言った。

「これは僕たちが祐子に向けて送ったボールなんです。時空を超えて祐子の元に行っていたようです。いま、祐子のメッセージを携えて戻って来たのでしょうか」

康介は驚いて大きく目を見開いたが一瞬言葉に詰まった。梓が言った。

「本当のことなのですね。まるでSF映画を観ているようです」

「何だか頭が変になりそうだな」

康介が独り言のように言ったが、まるで康介の言葉が聞こえなかったかのように亜希子が賢に尋ねた。

「あなた、祐子お姉さまと交信できたのですか？」

「うん、今話した」

「何とおっしゃっておられましたか？あなた、是非、わたくしにも教えてください」

「うん、今鹿島さんが読んだとおりのことを言っていた。ママユウコはやはり祐子だった。ルワンダの人たちと一緒に生きると言っている。だから自分を探すなど……」

「どうして、どうしてなのですか？祐子お姉さま、どうしてご自分をさらった人たちの為に生きるとおっしゃるのですか？どうして……」
亜希子は涙を流しながら叫んだ。賢は祐子の置かれている状況を理解していた。しかし亜希子たちには祐子がブチの首長の子供を宿していることを知らせてはまずいと思った。

「祐子の意識はもう、僕たちの意識の段階にはないんだと思う。善とか悪という基準はないんじゃないのかな。今は苦しんでいる人を救い、この場をパラダイスに変えようという意味しかないように見えるよ。もう、僕には手が出せない」

涙を流しながら亜希子が言った。

「あなた、どうして、そんなことをおっしゃるのですか？祐子お姉さまが直ぐ近くにいらっしゃることがわかったのですから、何としてでもお助けしたいですわ」

康介も亜希子に同調して言った。

「そうです。僕らはそのためにずっと努力してきましたんです。やっと祐子さんの所在がはっきりして、しかも、今は祐子さんがある程度自由裁量で行動できる立場にあるのですから、このチャンスに何とか助け出すべきだと思うんです。今行動すれば、祐子さんを助け出せるような気がします。賢さん、思い直してください」

賢は伏し目がちに下を向いて、黙ってしまった。賢は再び両手でボールを持ち上げた。そして意識で祐子に語り掛けた。

「祐子、聞こえるか？いま、ここには亜希子、鹿島さん、愛子、そして田辺さんが居るんだ。みな、お前を救うために来た。皆、絶対にお前を救い出すと言っている。それでも皆に会わないのか？」

「あなた、ごめんなさい。わたしを苦しめないで。今はこの道しかないの。わたしも皆に会いたいわ。だけど、ルワンダの人たちを救うことのほうが大切なの。ごめんなさい。あなた、愛しているわ。皆のことも、とても愛しているわ」

ボールがピンク色に変化した。賢は祐子に応えた。

「分かった。もう、会おうなんて言わない。だけど、今後もこのボールで交信することだけは続けよう。このボールは、身に迫る危険を色や、点滅で知らせてくれるし、相手の感情の変化を見るときに役立てることもできる。そして、俺や亜希子との交信の時にこのボールに向かって意識を投げかければ、相手にその意思があるときは交信することができる。そうだ、丁度ネットワーク・ルーターの役目をしてくれる。もう一つ、これは大きくすることもできるし、小さくすることもできる。そう命じれば従ってくれる。いいね。俺たちの間にはこのボールを使ったコミュニケーションという手段がある。どんなときでも意識を投げ掛けてくれ。俺はいつもお前に意識を向けているから」

「あなた、ありがとう。愛しているわ。とっても」

「おれも、愛しているよ。永遠にお前を愛している。たとえお前がどこに居ても関係ない。お前の使命が達成されたら、また一緒に生きよう」

「はい、あなた、待っていてね」

ボールはピンク色に変化した。賢が皆に向かって言った。

「今、意識で祐子とコミュニケーションを行うことができる。ボールを持って、試してみないか？」

「はい、わたくしに試させて下さい」

亜希子が賢の横に来て、賢の差し出すボールを受け取った。亜希子は暫くの間コミュニケーションを試みたが、祐子に繋げることはできなかった。ボールがキューーン・キューーンと音を立てた。次に愛子がやってみたが駄目だった。梓も、康介もどうしても通信を確立することができ

なかった。賢が言った。

「祐子的心思は変わらない。僕たちがたとえ、祐子の居るキャンプを見つけ出せたとしても、祐子は僕たちには会わないだろう。今回は一旦、引いたほうが良いと思うがどうだろうか。いずれ、時期が来れば祐子は我々の元に戻って来ると思う」

「ぼくは、祐子さんの意識は必ず変化すると思います。それまでに、どんなことが起きてくるか分かりませんから、僕はここで祐子さんを救い出せる機会が訪れる日を待ち続けます。皆さんは次の目的地に向けて移動してください」

鹿島の言葉に、賢は返す言葉が無かった。祐子が妊娠していることは最後まで口にしなかった。亜希子がハンカチで涙を拭いながら言った。

「わたくしは、絶対に祐子お姉さまにお会いします。もし、祐子お姉さまが、一生ここで人々の為に生きるとおっしゃっていらっしゃるのなら、是非祐子お姉さまからお話を伺いたいです。人を救うために生きる生き方をお教え頂きたいのです」

賢は亜希子が情緒的に不安定になっていると思った。

「亜希子、今は祐子をそっとしておいてやったほうが良いと思うよ。おそらく、祐子は地獄を覗てきたのだと思う。だから、僕らには無い感覚で、この国の人たちを覗ているように思う。亜希子、今回は諦めよう」

「あなた、許してください。わたくしは、暫くここに残ります。このまま帰りたくありません」

賢は再び、視線を落として寡黙状態になった。暫く無言の状態が続いたが、やがて梓が口を切った。

「まだ、解決できない問題がありますが、まずは夕食をいただきますか？」

梓の言葉で、沈黙の雰囲気は破れた。ホテルのレストランでも皆あまり話さなかった。賢と康介はルワンダのビール プリムスを頼んだ。一杯のプリムスは祐子に会えない悲しみを忘れさせてくれた。亜希子が出た

「わたくしにも一杯くださいませんか？」

賢は亜希子がアルコールに弱いことを知っていたが、何も言わずに亜希子のグラスにプリムスを注いだ。亜希子はそれを一気に飲み干した。もう一杯と亜希子が差し出したグラスを、賢は取り上げてしまった。亜希子は下を向いて目に涙を一杯溜めた。

「あなた、わたくしは、気が狂ってしまいそうです。あんなに大勢の人たちが苦しんで亡くなったのに、わたくし達はいつもおいしいものをいただき、きれいな服を着て、心地よい家に安らぎ、何事もないように生きてきました。どうして、こんなに差が出来てしまったのでしょうか。わたくしは、このままではいけないと思います。地球上で生きている人たちは、たかだか80億人でしょう。なのに、どうしてお互いのことを大切に思わないのでしょうか。悲しくて、どうすることもできません。自分たち部族の為に、あんなに優しい祐子お姉さまを掠^{さら}って行った人たちをお許しになり、救ってあげて、そして、そこを天国に変えようとされている、祐子お姉さまは神様です。それなのに、わたくしは何もできないで、ただよくよしたり、悲しんだりしているだけ。何と情けないことでしょうか。わたくしはここに残って、祐子お姉さまのお手伝いをさせて頂きたいわ。あなた、いいえ、鹿島さん、わたくしをここに住めるようにさせて頂けませんか？どこかに住める場所はありませんか？わたくしは祐子お姉さまを助けて、一緒に、苦しんでいる人たちをお救いしたいのです。だけど、あなた、あなたから離れて暮らすことはできません。あなたは出張を終えたら日本に戻られます。わたくしはどうしたらよろしいのでしょうか？あなた、教えてください」

亜希子は顔を下に向け、目に溜めた涙を拭いもせず、呟くように話した。薄黄緑色のブラウスからずっと出ている白い腕に赤みが差してきている。賢が亜希子を元気付けようとして言った。

「亜希子、君は心が純粹なんだ。だから、そんな風に苦しむんだ。自分の意識に忠実になって判断したらいいと思うよ。意識は誤った道を示したりはしないからね」

亜希子は黙って頷いた。しかし、そのまま目を閉じて項垂れている様子は、梓や愛子に少し酔っているような印象を与えた。亜希子の頬を涙が

伝わって流れた。食事を終えると、康介はアパートに帰ってブチ族の友人に連絡を取ると言った。4人は康介とフロントのロビーで別れた。亜希子がおぼつかない足取りで部屋に向かう階段を上りながら、自分の後を辿るように附いて昇って来る賢に、振り返って言った。

「あなた、今日はあなたとお話ししたいです。お願いですから、一緒のお部屋に休ませて頂けませんか？」

賢は、梓と愛子の方を見た。ふたりとも頷いた。亜希子が苦しんでいる様子が分かったようである。

「分かった。じゃあ、梓と僕が入れ替わろう。今日だけ特別にね」

「ありがとうございます。わたくしはまだ、どうしたらよいのか分からないのです。今晚、あなたに相談に乗って頂いて、自分としての結論を出します」

「うん、分かった。大切なことだからね。思っていることを全部吐き出したほうがいい」

3階の部屋に着くと賢は梓が来るのを待った。愛子が心配だったが、愛子はけろりとしていて、不安そうな様子はなかった。梓がスーツケースを引いてやって来た。賢は交代に自分のスーツケースを持って部屋を出た。扉を閉める前に賢は梓に言った。

「愛子のこと、よろしく頼むな」

梓はにっこり笑った。

「リーダー、大丈夫ですよ、隣の部屋ですから。何かあったら、直ぐに電話します。それより亜希子さんが心配です。リーダー、彼女の心の葛藤を取り除いてあげてください。彼女は心が純粹すぎるのよ」

「うん、僕は祐子より、亜希子の方が心配なくらいだ」

賢が亜希子の部屋に入ると、亜希子はベッドにうつ伏せになって泣いていた。外は夕日が差し込んでいて、壁に映った窓のシルエットが肌寒さを感じる部屋の空気にぬくもりを与えている。ここが赤道の近くだとはとても思えない。賢が亜希子に近づいて肩にそっと手を掛けると、亜希子はゆっくり起き上がって賢の顔を見つめた。

「あなた、ごめんなさい」

「いいんだよ。亜希子、悲しかったら思い切り泣けよ」

左手の甲で涙を拭ってから亜希子が言った。

「あなた、わたくしは、やはりここに残ろうと思います」

「亜希子、もう一度冷静に自分の意識を見つめてごらん。激しい衝撃を受けて、感情が不安定になってないか、意識が感情に振り回されていないかどうか、よく見つめてごらん」

「あなた、今夜はわたくしを抱いて寝てください。明日の朝になっても今の考えが変わらないようなら、わたくしはここに残ります。もし、あなたの愛でわたくしの想いが変わるようでしたら、わたくしは皆さんに附いて旅を続けます」

亜希子は賢の腕の中で、朝まで天に舞う心地で居た。このまま永遠に時間が止まってしまえばいいと思った。亜希子には明日のイメージが湧かなかった。あの鹿児島で失踪していたときに味わったふたりきりの生活のことを思い出し、賢の愛に抱かれて眠っていた自分が、今ここで再現できていることに、体全体が震えるほどの喜びを感じていた。寄せては引く波のような快感が心臓から身体全体に広がっていった。賢も自分が愛の権化と化したかのような感覚に陥っていた。亜希子への愛おしさが眉間から胸に掛けて広がってゆくのを感じた。亜希子の白く輝くような身体は博愛のオーラの輝きだと賢は思った。その美しい白い肌も強く労るような賢の動きで紅潮していた。翌朝、亜希子は4時に目が覚めた。ふたりとも一晩中意識がはっきりしていて、ゆるぎない愛で結ばれていたのだから、亜希子が目を覚ますと賢も同時に目覚めた。賢は亜希子を引き寄せて強く抱きしめた。

「あなた、わたくしはやはりここに残ります。わたくしは失われた心を取り戻すために、祐子お姉さまと一緒にここで生きます」

「そうか、決心は変わらなかったんだね」

「ええ、皆さんにはすまないと思いますが、どうかわたくしのわがままをお許してください」

「亜希子、今すぐ家に電話しなさい。ご両親にこのことを伝えなくてはいけない」

「はい、でも、多分両親からはお許しが出ないと思います」

そう言うと亜希子はベッドから降り、衣類を身につけてから、受話器を取って自宅に国際電話を掛けた。

「はい、藤代でございます」

「おかあさま、わたくし、亜希子です」

「亜希子さん、今どちらからの？まだアフリカなんでしょう？」

「はい、キガリのホテルです。おかあさま、昨日お電話さしあげましたでしょう。みなさんは今日までルワンダにおられる予定です。でも、わたくしはずっとルワンダに居ることに致しました。どうか、わたくしのことはご心配にならないでください。わたくしはこちらでお亡くなりになった人々の鎮魂を致したいのです。大勢の方々が、あまりにも過酷な人生を生きられてお亡くなりになり、魂も迷っておいでなのです」

「亜希子、何を言っているんですか？あなたのおっしやることの意味が、わたくしには全く分かりませんわよ」

「おかあさま、わたくしはもう決めてしまいました」

「亜希子、少しお待ちなさい。お父様を呼んで来ますからね」

亜希子は登紀子の声が聞こえなくなると、賢の差し出した手を握り締めた。

「あなた、あなたの意識はいつもわたくしの側に居てくださいますわね」

「うん、いつも君の近くに居るよ」

「約束してください。絶対にわたくしを放さないって」

賢は右手で拳をつくり、小指を上げた。亜希子はその小指に自分の右手の小指を絡めた。

「もしもし、亜希子か？わたしだ。一体何があったと言うのだ？」

「お父様、別に変わったことはありません。ただ、わたくしは、ジェノサイドの被害に遭って亡くなられた人たちのミイラのような死体を見ました。そして、意識でその人達の中の何人かの女性と話をしました。とても悲惨な出来事だったのです。亡くなられた方々は、まだ自分がどういう状態に居るのか分からないのです」

「だから、どうしようというのだ？」

「はい、わたくしはその方々の魂の道案内をして差し上げたいと思います。そして、生まれる前にあった状態に戻してあげたいのです。それがわたくしの今世の役割のような気がするのです。お父様、お許してください。わたくしはここに残って、亡くなられた人たちの魂を鎮めてあげたいのです。このままでは、あの方々があまりにも哀れです」

「そうか。お前は優しい娘だから、きっとそうせずには居られないのだろう。しかし、そこにそのまま居座るわけにはいかないことは分かるだろう。ひとまず日本に戻りなさい。いろいろ相談しよう。もしアフリカに住むのであれば、それなりの準備をしなくてはならない」

「おとうさま、お許してください。わたくしは日本には戻りません。ここで暮らします」

「何を馬鹿なことを言っているのだ。お前にそんなことをさせるわけにはいかないし、そんなことができる訳がない。いいから、一旦日本に戻りなさい。それから準備をすればいいのだから」

藤代肇と登紀子の会話が受話器を通して聞こえて来た。

「お前からも、亜希子を説得しなさい」

「あなた、それではどうしても亜希子は帰らないと言うのですか？」

「そうだ。どうしたというのだ。もう自分で決めてでもいるかのような口調だ」

「あなた、わたくしが、話してみます・・・亜希子さん、亜希子、聞いているのね？お父様も、わたくしもとっても悲しいわ。あなたがわたくしたちの元を去って、アパート住まいをしてしまったからは、わたくしは悲しくて夜も眠れないのよ。まして、アフリカに住むなどと聞いては、わたくしはもう生きてゆけないわ。お願いだから、日本に戻って来て。わたくしの一生のお願いよ。ねえ、亜希子さん」

「お母様、もうわたくしは決めてしまいました。許してください。わたくしはここの人達と一緒に生きます。アフリカには祐子お姉さまもいらっしやるのです。わたくしはお姉さまにお会いして、一緒にここで生きます。許してください」

「亜希子さん、そちらに内観さんはいらっしやらないかしら？いらっし

やったら、ちょっと電話に出て頂けないかしら？」

賢は漏れ聞こえる電話の声に耳を澄ませていた。亜希子が受話器を渡すと一呼吸置いて話し始めた。

「もしもし、電話を代わりました内観です」

「内観さん、亜希子はどうしたのでしょうか？可笑しくなってしまったのでしょうか？」

「いいえ、亜希子さんはもともと心が純粹で、優しいお方です。わたしも一旦日本に戻って、よく考えて判断したほうが良いと申し上げたのですが……」

「ちょっと、主人に代わります」

「もしもし、内観君かね？」

「はい、社長、内観です」

「君は、いったい何をやっているのかね。アフリカに行った目的はドゴン族の考え方を調べるためじゃあないのかね」

「はい。それも目的の一つですが、もう一つ大切なことがあります。祐子お嬢様をお探しすることです」

「それは分かっているが、どうして亜希子がアフリカに住まなきゃならないのだ。それもわざわざ危険な地域に」

「わたしにも分かりません。わたしはこの国の人達がどういう意識の変化で、あのような悲惨な殺戮を行うような結果になったのかを調べたかったので、亜希子さんも一緒にジェノサイド・メモリアルを見学したのです。亜希子さんはそのときに大きな衝撃を受けられたようです。そして、被害者の方々の魂を救いたいとお考えになられたようです」

「きみは、亜希子を守ると言わなかったか？守っていることにならないじゃあないか」

「はい、わたしの力不足です。外側から来るものからはお守りできますが、亜希子さんの内側から来るものを防御することはできません。亜希子さん自身の変化ですから、それは僕がどうすることもできません」

「そんな屁理屈は聞きたくない。兎に角、首に縄を掛けてでも連れ帰って来てくれ。いいな、分かったか」

「社長、亜希子さんが一旦意思を固められたら、もうどうすることもできないことは良くご存知でしょう。強引にお連れすれば、今度はテレポーテーションして、こちらに来てしまいます。そうしたら、もうお探しすることもできません。それでもよろしいのですか？」

「そんなことは、どうなるか分かりはしない・・・なあ、内観君、わたしは亜希子の父親だ。ただ一人になってしまった娘まで失ってしまったら、わたしも妻ももう生きる望みがなくなってしまう。おねがいだから亜希子を説得してくれ、頼む」

登紀子が電話口に出た。

「内観さん、お願いいたします。わたくしたちをお救いください。あなたにおすがりするしかないのです・・・」

「・・・分かりました。亜希子さんを日本までお連れ致します。でも、途中でテレポーテーションされてしまった時は、どうかお許しください」

「わたくしたちはお祈りしております。ありがとうございます」
再び藤代肇に代わった。

「内観君、ありがとう。亜希子のことをよろしく頼む。それから、残りの調査もよろしく頼むよ」

「はい、承知いたしました」

賢は亜希子の方に視線を向けたが、亜希子は首を横に振った。賢は受話器を置いた。

「亜希子、やはり一旦日本に帰ろう。もしこのままここに残留したら、亜希子は無駄死にになってしまうかもしれない。ここは安全ではない。いいか、ここに戻って来る方法を考えよう。それと、君には一度僕の両親に会ってもらいたいんだ。僕の永遠の恋人として」

「・・・あなた、愛しています・・・」

「ぼくも、亜希子を愛している。今も、これからもずっと・・・」

賢と亜希子は強く抱き合った。亜希子は暫くの間賢から離れようとしなかった。

「あなた、あなたのご指示に従います」

4人はレストランで落ち合った。顔を合わすと直ぐに梓が心配そうに、しかし、きわめて冷静な口調で言った。

「おはようございます。亜希子さん、どうなりましたか？」

「おはようございます。ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした。初めの予定通り、皆様とご一緒させて頂きます」

愛子が言った。

「ああ、良かった。わたしたち心配してたのよ」

「ごめんなさい。もう、大丈夫ですわ」

梓は亜希子の言葉の中に、一筋の悲しみを見た。妥協したのだと思った。

4人が朝食を済ますと、康介がロビーで待っていた。

「おはようございます。今日の行動予定は？」

賢が応えた。

「鹿島さん、申し訳ありません。僕たちはここからバマコに向かいます。今回はこれ以上祐子さんを探しません」

「あなたがたはそれでいいんですか？もしかしたら、何らかの事情があって、自分を探さないようにと言っているのかもしれませんがよ」

「はい、そのことも考えました。でも、今回は祐子さんのメッセージを尊重することにしました」

「そうですか。はるばるアフリカまで来たのに、残念ですね」

「はい、でも、仕方ありません」

亜希子は下を向いて唇を噛み締めていた。

「鹿島さん、ここに1万ドルの小切手があります。いざという時に使ってください」

賢はセカンドバッグから朝出掛けに用意した小切手を取り出して康介に渡した。

「祐子さんが窮地に陥ったときに使わせてもらいます」

朝食後梓がフライトのコンファメーション（搭乗確認）をしてあった。ホテルのチェックアウトが済むと、康介は無言で4人のスーツケースを車に乗せ、全員が乗ったのを確認すると、キガリ国際空港に向けて車を発進させた。空港に着いたが、その日のナイロビ行きの便はエンジント

ラブルで飛ばないとのことだった。4人はナイロビで乗り継ぎ、バマコに行く予定だったが、翌日のフライトに変更せざるを得なかった。康介はほくそえんだ。もう一日賢たちと一緒に居ることができると思った。康介が言った。

「たとえママユウコに会えなくても、最近ママユウコが居る可能性の高い場所まで行ってみましょう。ママユウコがどんなところで生きているかを知っておいたほうがいいと思います。僕がホテルの予約とレイトナイトアライバル（深夜到着）のコンファメーション（確認）を取っておきます。」

賢は同意した。もしそれが可能なら、祐子の居る場所を観ておきたいと思った。

そこはキヴ湖の近くのキヴエという町の外れにある岩山の影だった。辺り一帯森林が茂り、滅多に人の近づかないような場所だった。山肌に山羊が放牧されているのが見えた。

「この奥のはずなんです。俺も1度も来たことがないんですけど、この奥に昨日のキャンプより少し小さいキャンプがある筈です」

でこぼこ道をゆっくり進んでゆくと、果たしてそこには昨日行ったキャンプより心持ち小さなキャンプがあった。昨日と同様5人の兵士が銃を構えて出て来た。全員緊張した。しかし、対応は昨日と全く異なっていた。

「Are you Japanese?」（日本人ですか？）

兵士の中の一人が英語で聞いた。康介が応えた。

「Yes, we are. We want to meet with Mama Yuko.」（はい、そうです。ママユウコにお会いしたいのです）

康介は最初から単刀直入に切り出した。ひとりの兵士が少し待つように告げてからキャンプの中に入って行き、暫くして戻ってきた。

「Are you Ken?」（あなたは賢さんですか？）

「Yes, this is Ken.」（はい、これが賢です）

康介は賢を指差して応えた。

「I have a message from Mama.」（ママからの伝言を預かっています）

そう言いながら、兵士は紙切れを康介に手渡した。そこには日本語でメッセージが書かれていた。康介はそれをそのまま賢に渡した。

「みなさん：日本からはるばるいらしてくださいありがとうございます。でも、わたしは皆さんにお会いできません。ですから、あなたたちのおられる場所には居ません。もう、わたしを追わないでください。賢さん：愛しています。あなたの元に駆けつけたいのですが、どうやら、これがわたしの生きる道ようです。約束は守ります。必ずあなたの元に戻ります。亜希子さん：あなたを愛しています。わたしもあなたに会いたいです。でも、わたしを探してはいけません。あなたの進むべき道を生きてください。これが運命なのです」

賢がメモを全員に回した。亜希子はその文章を読むと、わなわたと震え、涙がぼたぼたと落ちた。皆沈痛な面持ちになった。康介が兵士に頼んで、病室を見学させてもらえることになった。5人は看護婦に案内されて病室の中を見学した。全員愕然とした。そこはまだ生々しい傷を負った人達が所狭しと床に着いていて、看護婦が必死に看病している戦場の病棟だった。昨日見た病室よりさらに悲惨な戦闘がごく最近にあったことは明らかだった。苦しくて泣いているものもあった。負傷した女性も大勢居たが、天井から吊り下げられたカーテン1枚で女性の場所を仕切っているだけだった。看護婦も英語で話した。

「Many people died. Their hearts and bodies are injured seriously」(大勢亡くなりました。彼らの心も体もひどく傷ついています)

目を開けている患者たちは、5人の姿を追っていて、悲しげに語りかけて来るようだった。カーテン越しに視線を送って来ていた女性は、左腕が無かった。左の額から頬に掛けて10センチ程の傷跡があり、上唇の左側がえぐれる様に切り落とされていた。傷はやっとふさがったような感じである。輝くようなブラウンの右頬が、傷付いた左の頬と対照的で、その痛々しさを物語っている。一杯涙を溜めて見つめている彼女の瞳と目が合った亜希子は、その女性のところに駆け寄った。

「Ninyi kuteswa na maumivu. Una machungu aliishi siku. Natumaini kupona haraka.」(痛かったです。辛かったです。がんばってね

都バマコ行きの飛行機の予約に取り掛かった。手続きにかなり手間が掛かった。キガリ空港から一旦ナイロビに飛び、そこからバマコに行く工程を探った。翌日はナイロビからバマコへの直行便は無かった。窓口を確認すると3日後だと言う。ナイジェリアのアブジャに向かう便はあった。そこからバマコに行くにはアブジャで1泊する必要がある。アブジャからバマコへの便はプロペラ機だったが、他に選択肢は無かった。その他のコースはどれもドゴン族の居住区まで4日以上掛かった。梓は賢から行程に附いて一任されていた。既に遅れもあるので迷い無くアブジャ経由のコースを選択した。このコースではアブジャのホテルも予約できた。予約を完了するまでに3時間掛かった。亜希子はその間、賢の部屋に居た。愛子は一人で窓のそばにある椅子に掛け、窓からひっそりとしたキガリの街を見つめていた。賢と亜希子はふたりで祐子へのコンネクションを試みた。祐子の意識が賢たちに向いていることが分かった。ボールがブルーに輝き、直ぐにコンネクションが確立した。亜希子がどうしても祐子と話したいと言った。賢は亜希子と祐子のコミュニケーションを意識で観ることにした。

「祐子お姉さま、お分かりになりますか？ 今日、わたくしたちはお姉さまのすぐ近くまで参りました。そこにお姉さまがいらっしゃると感じました。どうして、お姿をお見せ頂けなかったのでしょうか？ わたくしはとても悲しくて耐えられませんでした」

「亜希子さんね!? わたくしはあなたたちの姿を見ていたのですよ。でも、どうしてもわたしの姿を見せるわけにはいかないのです。そのことを受け入れてください。あなた方がお帰りになるとき、恥ずかしながら自分の運命の滑稽さに笑い崩れました。そして、あなたたちの元に行くことのできない悲しさに涙しました。でも、これがわたしの生きる道なのですよ。ここであなたたちに会ってしまったら、わたしはルワンダの人達を見捨てることになってしまいます。まだわたしには自我が残っていて、時々、以前の自分に戻ろうともがくんです。だから会えなかったのですよ。ごめんなさいね」

「祐子お姉さま、わたくしにも祐子お姉さまのお手伝いをさせて頂けな

いでしょうか？一旦日本に戻りますが、直ぐに帰って来ます。そして、祐子お姉さまと一緒にルワンダで生きてゆきたいのです」

「亜希子さん、あなたの気持ちは尊いと思うわ。でも、あなたにはご両親がいらっしゃるでしょう。ご両親の元で生きること、それがあなたの運命なのよ」

「いいえ、わたくしはもう両親と一緒に生きることはできません。苦しんでいる人々を助けるために生きます。祐子お姉さま、お願いですからわたくしにもお手伝いさせてください」

「分かったわ。でも、一度日本に帰ってからね。お父様やお母様とよく相談してからになさいね」

「分かりました。わたくしは必ず戻って来ます」

「亜希子さん、ごめんなさい。もう、巡回に出なくてはならないの。お元気でね。賢さんにもよろしく伝えてね」

賢は意識でふたりの会話を聞いていた。そして、祐子にメッセージを送った。

「祐子、くれぐれも自分の身体を大切にしろよ。また連絡するからな」ボールは点滅を繰り返し始めた。クウィーン・クウィーンと音がしてコネクションは切れた。賢はボールをゴルフボールほどの大きさに変化させ、ポケットに入れた。

祐子はバラックに言われて、夜間の看護婦業務は行わないことにした。しかし、床に着くまで、祐子は病人たちを廻り病状の改善を祈ったり、家族の話聞いてあげたりした。比較的軽症な患者の内臓の疾患や、筋肉、腱などの痛みは、祐子が患部に手をかざして10分ほど祈ることで、ほとんど治癒してしまった。患者たちは知らないうちに、祐子が廻って来るのを首を長くして待つようになった。そんな患者たちに祐子はいつも、

「*****」(わたしは何もしていないのよ。すべて神様がなさっているのよ)

と言った。講演のある日は必ずバラックがやって来た。祐子にとっても

待ちどろしい日であった。祐子が身ごもったことを知ってからのバラックの祐子に対する気遣いは、傍^{はた}から見ても過ぎるほどだった。祐子はそれに対して是非を口にするとはなかった。バラックに対しては何時も感謝の念を抱いていた。悪阻も治まり、妊娠は安定期に入っていた。バラックは祐子を気遣って、何度も自分の家で生活するように言った。しかし、祐子は聞き入れなかった。平和な日々が続いた。患者の多くが退院してゆき、病室も空間にゆとりが生じてきた。ジュタも退院できる状態になったが、身寄りも家も無かったので、祐子はバラックに頼んでジュタを孤児院に入園させてもらうことにした。ジュタは祐子と別れるのを寂しがったが、その一方で孤児院に行くことを楽しみにしていた。祐子は慰問のために週に2回は他のキャンプを尋ねた。バラックはそのことに賛成しなかった。車での移動になるので、いつ敵の襲撃を受けるか分からないことと、妊婦がでこぼこ道を車で移動することに不安を抱いていた。祐子がどうしても行くと言うので、バラックは自分の自動車に祐子専用の振動吸収シートを用意した。運転手席の真後ろの席のスプリングをやわらかいものに交換し、衝撃吸収シートを敷いて、外の振動が直接伝わらないようにした。足を受ける底板の上にも衝撃吸収素材のシートを敷き、背もたれには羽毛のクッションを当てた。車の移動中に直接強い振動を感じることはなくなった。それを知った看護婦や兵士たちも、当然のこととして受け止め、祐子が車に乗り降りするときは、必ず看護婦一人と兵士一人が祐子を補助した。祐子はこれほどまでに自分を大切にしてくれるブチ族の人達全員が幸福になるように祈らずにはいられなかった。15回目の講演の前日、祐子はキヴ湖のほりにあるキャンプを訪れることにしていた。バラックがそのキャンプに居た。その日はブチ族の結束記念日で、そこでパーティが行われることになっていて、ブチ族のリーダー的な人達が集まる予定だった。このキャンプには他のキャンプに無い、300人ほどを収容できる大きなホールがあった。パーティの後、祐子がホールで「家族と愛」というタイトルの講演をすることになっていた。縄文時代からの日本人の家族のあり方と最近の個人主義に流れる風潮を対比し、人びとの生きる場としての理想的な

家族のあり方を話すことにしていた。バラックは祐子の講演を楽しみにしていた。看護婦たちのうちの何人かは籤引きでキヴェのキャンプに行くことになった。籤に当たったものは皆、10時からのパーティに出席するために一張羅を着て大型のトラックで朝早くに出掛けた。祐子は自分の患者を診回り、講演に間に合うように2時少し前にキャンプを出ることにしていた。祐子も一張羅を着た。机の上に置いてあるボールが赤色の点滅をしていた。いつもと違い早いサイクルでの点滅だった。祐子は「ボールもわたしたちを祝福している」と思った。ピピが祐子と一緒に行動することになっていた。スージは既にめかしこんで5人の看護婦と一緒に出かけていた。マリゼは留守を担当することになったが、特にうらやましがることなかった。しかし、一緒に残った3人の看護婦達は、籤引きで外れたことを悔しがっていた。ピピは本心では午前中の祝賀会に出席したかった。そこには若い兵士たちが大勢集まるはずだった。朝から出掛ける看護婦たちの近くに行き、彼女たちの嬉嬉とした顔を見て羨ましそうにぶつぶつ言っていた。昼になって、祐子たちは昼食を採ることにした。残った看護婦が少ないので、2人ずつ順番に食事をした。祐子はピピと一緒にテーブルにスープを運んできて腰掛けようとした。そのとき、一人の護衛に残った兵士が駆け込んで来た。

「*****」(ママユウコ、大変です。キヴェが襲撃を受けました。)

「*****」(どうしたのですか？詳しく話してください。)

祐子は意識を冷静に保つように努めて言った。兵士はわなわたと震える声で言った。

「*****」(パーティの最中に、クツが襲って来たのです。ほとんど全員やられました。)

祐子は言葉を失った。目から涙が流れ出て来た。ピピは呆然として、手にしていたスープの器を床に落とした。器はテーブルにぶつかって転げ、スープが床に飛び散った。ピピはそのまま床にうずくまって泣き伏した。祐子はピピの肩を優しく抱いて立ち上がらせ、椅子に腰掛けさせた。ピピは祐子の胸の中で泣き崩れた。祐子は感情の高ぶりを抑え、意識がぶれないように努めた。声を出して泣いているピピの手を引いて看

看護婦室に向かった。

「*****」(ピピ、全員集めて、急いでね！)

ピピは涙でくしゃくしゃになった顔を縦に振った。暫くして、4人の看護婦と5人の兵士が看護婦室に集まった。祐子は全員を前にして言った。

「*****」(皆さん、冷静になるのですよ。わたしたちはここを守らなくてはなりません。自分の仕事をきちんと行ってください。わたしと一緒にキヴェエに行く予定だった人は、今直ぐに、できるだけの医薬品と応急用具を持って出発しましょう。)

看護婦たちが、このキャンプの患者の治療に必要な薬品を除き、ある限りの医療具の入ったダンボール箱を車に積み込んだ。運転手とピピ、それに兵士一人を伴って祐子は出発した。車が動き始めて暫くすると、祐子の胸に悲しみの渦が巻き起こった。その悲しみは祐子の全身に広がっていった。祐子の中に居るもうひとつの命が、祐子の悲しみに同調したかのように打ち震えだした。祐子は、腹に手を当てて静かに擦った。嬰兒の震えは静まって来た。祐子は神に祈った。

「神よ、キヴェエの人たちを救いたまえ。彼らを守りたまえ。あなたあー、たすけてください。ああ、あなたあー、皆を救ってください。助けに来てえー・・・・・・・・」

バラックの作ってくれた特別シートのおかげで激しい振動は無かったが、キヴェエはとてつもなく離れているように感じられた。長い長い時間が経過してキヴェエのキャンプに付いたのは2時過ぎだった。キャンプの前には10台ほどのバイクが横転していて、兵士と見られる男たちが血だらけになってバイクから離れて倒れていた。辺りには小銃が散乱している。祐子の車が近付くと、キャンプの建物から一人の兵士がよろけながら駆け寄って来た。その兵士も右腕から血を流している。ブラウンの肌が血の気を失ってどす黒く見える。

「*****」(ママユウコ、申し訳ありません。みんなを守りきれませんでした)

そう言うと、兵士はその場に倒れこんだ。祐子は急いで車から降りると、

兵士の肩を抱き上げた。

「****」(しっかりしなさい！・・・ピピ、消毒液と包帯を取って)

祐子は直に兵士の腕の傷を消毒し、包帯で縛り上げた。包帯は血の色に染まってきたが、少ししてその広がりも止まった。祐子は車から降りた兵士に向かって言った。

「****」(へラパディロー、この人を中に運んで。ピピ、わたしたちは直に中に入りましょう)

うめき声が聞こえてきた。ピピが先導して段ボール箱を抱えながらドアを開けた。火薬の臭いと、生臭い臭いがプーンと鼻を突いた。入り口から奥に向かって歩いてゆくと、祐子は苦しみの感情に押しつぶされそうになった。静かに深呼吸をすと思い切って奥に突き進んで行った。祐子達の眼前に地獄絵が展開された。祐子は頭の中が真っ白になり、呼吸が止まった。

「あなたあー、助けてください。ああ、あなたあー、皆を救ってください。助けに来てえー・・・・・・・・」

ピピは壁に向かってしゃがみこんで、嗚咽とともに吐いた。そこは血の海だった。病人と、兵士と、看護婦、それに今朝着飾ってキガリのキャンプを出て行った者たちが折り重なるようにして倒れている。まったく動きが無い。窓ガラスが全て割れていた。どこかから「うーん、うーん」という呻き声が聞こえる。祐子の意識には、その呻き声も、この悲惨な情景に添えられた瓦解の音のように響いた。祐子は呆然として血の海を歩いた。足が滑ったが、肉体の意識がそれを正そうとするのに任せた。目からは涙が止め処なく流れ出た。呻き声はきれいに着飾った女性の下敷きになっている男が発していた。女性はスージだった。

「****」(スージ、スージ、あなた、しっかりするのよ。スージ、ねえ、起きて・・・・・・・・ねえ、お願いだから、起き上がって)

体を抱き起こしたが、スージは既にこと切れていた。胸と下腹部が血で染まっている。一張羅の黄色の服が朱色に変わっていた。

「****」(ああ、スージ、なんてひどいことを、スージ、ねえ、

起きて！)

祐子がスージを抱きしめようとする、泣き叫びながら走ってきたピピが、祐子を押しのけてスージに縋り付いた。そして、両手でスージの肩を揺り動かした。

「*****」(スージ、さあ、帰りましょう！さあ、早く帰らないと、また、怖いクツが来るわ！さあ、早く目を覚ますのよ。スージ！・・・
・・・だんなが仕事から帰ってくるわ。早く起きなさい！)

祐子は唸っている兵士を抱き起こした。肩を銃弾が貫通しているようだった。両足にも銃弾を受けた跡があった。上着が血に染まっているのは腹部を横から打たれているからだった。祐子はピピの持っている救急具の袋を開き、中から消毒薬と包帯を取り出した。血を拭い、急いで傷口を消毒した。普通なら悲鳴を上げるほど傷にしみる消毒液に対して、兵士は全く反応を示さず、ただ、「うーん、うーん」と呻き声を発しているだけだった。祐子の目から流れ落ちる涙は頬をびっしょり濡らしている。兵士がうつつらと目を開けて、やっと聞こえる声で言った。

「*****」(ママユウコ、ママ・・・)

兵士はそのまま、祐子の腕の中でこと切れた。祐子は兵士の遺体を横たえ、ピピが泣き縋っているスージの遺体をピピからそっと離し、兵士の横に横たえた。ピピは既に冷たくなったスージの顔を撫でながら、話し掛けている。

「*****」(スージ、スージ、この ^{かたき}敵はわたしが必ず打つわ。必ず・・・)

祐子はスージをその場に残して立ち上がった。ガーゼを手にする、倒れている一人一人の血を拭って歩いた。誰一人息をしている者は無かった。惨殺死体の中を部屋の一番奥まで歩いて来ると、祐子は頭から完全に血の気が引いた。持っていたガーゼを落とし、その場に膝から崩れおちた。バラックだった。マイクを手にした状態でうつぶせに倒れていた。こめかみに銃弾を受けていた。それだけでなく、体中に数え切れないほど銃弾を浴びた痕があった。祐子はバラックを仰向けにした。バラックは口をキッと結び、苦痛に耐えているような顔をして息絶えていた。

「バラック、あなた、愛しているわ。あなた……辛かったですよ。あなた……なんてひどいことを……えーん、えーん、えーん、えーん……」

祐子はバラックの遺体を抱きしめて泣き崩れた。

祐子が指導をし、戦闘の3日後にキヴェの犠牲者の部族葬を行った。各地からブチ族の代表者が出席した。そのとき出席したブチ族の長老と思われる老翁から、祐子にブチ族の母となるように依頼された。祐子の噂はブチ族の間では既に事実とみなされていて、バラックを失った今、バラックの子供を^{みごも}妊っている祐子は、将来首長となる者の母であるとの説明を受けた。12人の長老による協議の結果だとも伝えられた。祐子はブチ族の母となった。それまで部族のものから「ママユウコ」と呼ばれていた呼び名が時として「ママ」に替った。先ず初めに、祐子は仕返しを唱える長老たちに対して、「決して報復をしてはいけない」と釘を刺した。「もし仕返しをすれば、戦争になってしまう」と言って説得した。長老たちは唇をかみしめていたが、自分たちが選んだ種族の母の言葉に従わざるを得なかった。祐子は兵士の前に出るときは小銃を手にした。実際に銃を撃つことはなかったし、撃てる筈もなかったが、その姿は、女戦士を髭髯とさせるものだった。しかし祐子は事あるごとにクツ族に対する戦闘行為はできるだけ避けるように兵士たちに伝えた。自公用に兵士の着用する制服を1着用意させそれを身に着けた。兵士たちの前に出るときは素肌にも布を巻き付けて、胎児を守るのと同時に、体を大きく見せる工夫をした。国際ジェノサイド条約のおかげで大量虐殺の危険性は薄れたが、部族間の憎しみの感情はどんなに拭いても拭い去ることのできないほど、心の奥底に薰充していて、一旦何らかの引き金が引かれると、その感情がエスカレートして押し留めることが難しくなるのだった。ある晩、一人の兵士が祐子の部屋を訪れた。兵士は祐子に伝えておきたいことがあると言った。

「****」(ママ、わたしはキヴェで襲撃を受けたとき、戦闘の後、逃げるクツを追って行った3人の兵士の内の一人です。わたしは哨兵の役を任されていました。あの襲撃の前にマリーを見たのです。彼女はベ

ールを被っていましたから、直ぐには分かりませんでした、風でベールが翻り素顔が見えたとき、確かに彼女でした)

「*****」(可笑しいわね。マリーはフランスに行っているはずなんだけど)

「*****」(それも、クツを追っているとき、銃を持ったクツの奴のバイクの後ろに乗っていました。一緒に逃げていました。あれは、マリー以外の何者でもありません。)

「*****」(ありがとう、でもこのことは誰にも話してはいけませんよ。あなたが危ない目に合う危険性がありますから)

兵士は了解して帰った。祐子は海外に居て、自分が5歳以上年上の兵士に命令をしていることを不思議に思った。兵士は敬礼をして帰って行った。祐子は兵士達がバラックに対して敬礼をするのを一度も観たことがなかったので、そのことも不思議に感じた。哨兵役の兵士が訪れて来た2日後に、マリー・ジュベステルがキガリのキャンプにやって来た。キャンプには他の地域から支援に駆けつけた看護婦が5人ほど働いて、一見、キヴェでの出来事など何も無かったかのような錯覚を起こすほど平穏な印象を与えた。襲撃から半月が経過していた。看護婦室に現れたマリー・ジュベステルはそこに居たピピと3人の看護婦、護衛の2人の兵士、そして祐子に向って、悲しそうな顔をして言った。

「*****」(キヴェのことを聞きました。クツは何とひどいことをするんでしょう。悲しくて、涙が流れます。直ぐに反撃に出なくてはなりません。クツをこのまま放置しておくわけにはいきません。バラックたちの敵^{かたき}を討たなくては)

祐子が前に出て言った。

「*****」(マリー、それはいけません。復讐心を起こしたら過去のジェノサイドの再現になりかねません)

マリーは日本語で祐子にだけ分かるように話した。

「おまえ、奴隷だ、偉そうなこと言うじゃない」

祐子はスワヒリ語で応えた。

「*****」(わたしはもう、奴隷じゃない。ブチ族の母になった。)

あなたの命令は受けない。あなたもわたしに従ってもらう)

マリーは激怒した。

「いつから、そんなことになったんだ。おまえ、金で買われた。わたし許さない」

「*****」(もう、ブチ族があなたに踊らされることはない。わたしがブチ族を守る)

マリーは祐子に掴み掛かった。2人の護衛兵がマリーを取り押さえた。

「*****」(この女性は、わたしたちブチ族をクツ族と戦わせようとしている。この女性を捕らえなさい)

1人の兵士が、大声で喚きながら抵抗するマリーの両手を後ろで抑え、もう一人の兵士が、部屋の隅にあった梱包材の縛り紐でマリーの両手を縛り上げた。祐子が言った。

「*****」(この女性は、クツ族の兵士をキヴェエに差し向けた張本人です。許すことのできない悪人です)

マリーが大声で叫んだ。

「*****」(お前たち、この女に騙されてはいけない。こいつは奴隷として、インドから買って帰った女だ。娼婦だ。ブチ族の母なんかじゃない。騙されるな)

ピピが走り寄ってきて、いきなりマリーの頬を平手打ちした。

「*****」(スージを返せ。お前がスージを殺した。ここの仲間をみんな殺した)

兵士の一人が拳を握り、思い切りマリーの頭を殴った。マリーはその場に倒れて、床に転げた。

「*****」(きさま、俺たちの仲間を殺しやがって、許しておけねえ)

兵士が怒鳴ると、ピピはヒステリックに、机の上にあったファイルを掴み、倒れているマリーに投げつけた。祐子が言った。

「*****」(皆、興奮しちゃ駄目よ。これから、この女性をどうするか考えましょう。わたしたちには、この女性を裁く権利は無いわ) マリーは大声で喚いた。

「*****」(縄を解きなさい。こんなことをしたら、あなたたちどんなことになるか分からないわよ)

支援に来た2人の看護婦が不安そうな顔をした。祐子が言った。

「*****」(マリー、あなたが反省し、もう二度とこんな真似はしないと誓わない限り、あなたは開放されないわ)

祐子の命令でマリー・ジュベステルはトイレの横にある柱に括り付けられた。そこは苦しんでいる傷病人の姿が手に取るように見える場所だった。祐子はマリーが反省するまで、食事と水だけを与え、着替えることもトイレに行くことも許してはならないと全員に命令した。そして、マリーに対して暴力的な行為をすることは一切禁じた。翌日の昼頃、マリーは失禁した。そして、土の床の冷えからか、下痢の排便をもらった。それでもマリーは降参しなかった。マリーの周辺は悪臭が漂い、トイレに行くときにそこを通るものたちの感情は、マリーに対する憎悪から、汚物の異臭に対する嫌悪の感情に変化していった。最初は大声で喚いていたマリーも終に諦めた。最初の日には食事も拒否していたが、失禁をした頃から、祐子から給仕役を命じられた食堂の女性がスプーンで掬って口に持ってきた食事を食べるようになった。2日間祐子は直接マリーの前に姿を見せることはしなかった。しかし、マリーは病室で病人を看病している祐子の姿をいやというほど目の当たりにすることになった。傷病人の苦しんでいる姿と、祐子に対する憎しみの感情が交錯して、マリーは初めの2日間は半狂乱の状態にあった。3日目にマリーは給仕役の女性を通して、祐子に話をしたいと言って来た。祐子は応じなかった。給仕役の女性はマリーの周りが高まりにも臭いので、何とかならないかと祐子に言った。祐子は、「我慢してね」と応えた。4日目の夕方、ピピが祐子の部屋にやって来た。祐子の部屋の中ではピピと祐子は友達同士のままだった。

「*****」(ママユウコ、マリーをどうするつもりなの?)

「*****」(許すつもりよ。その前に反省してもらっているの)

「*****」(あんな悪い女は反省しないわよ)

「*****」(今はね。だけど、きっと気が附くわよ)

「*****」(どうやって気づかせるの?)

「*****」(あなたよ。あなたが、マリーを救ってあげるの)

「*****」(そんなの、無理よ。あんな悪い女)

「*****」(いいわね、明日、朝早くにね、あなたはマリーの所に、洗面器にお湯を入れ、タオルと下着を持ってゆくのよ。まず、マリーの汚物の始末をして、きれいにするの。そして、マリーの下着を替えてあげるのよ。スカートの汚れも忘れずに落としてね。その後で、消臭用のスプレーを廻りに掛けるの。誰もいないときにやるのよ。一言も喋っちゃ駄目よ)

「*****」(わたし、できない。そんなこと)

「*****」(ピピ、これは皆のためよ。わたしを信じて)

「*****」(・・・分かったわ。やってみる)

翌日の7時頃ピピが祐子の部屋にやって来た。

「*****」(ママユウコ、やりました。マリーは涙を流していました。わたしはスージや仲間のことを思い出して、涙が止まりませんでした。でも、必死にやりました)

「*****」(ありがとう。それでいいわ)

祐子はピピを抱きしめた。ピピが食事を摂るために戻ってゆくと、暫くして、給仕役の女性が祐子の部屋にやって来た。

「*****」(ママ、マリーの周りがきれいになっていて、びっくりしました。それに、マリーがわたくしの与える食事を口にするとき、泣いていました)

昼食が済んで、祐子が部屋に戻ると、給仕役の女性が再びやって来た。

「*****」(ママ、マリーが涙を流して言いました。自分が悪かった。一度ママにお会いしたいって)

給仕役の女性が戻ってゆくと、祐子はナイフを手にして部屋から出た。マリー・ジュベステルは目に涙を一杯溜めて祐子を見上げた。祐子は言った。

「辛かったです。もういいわ。わたしの部屋に行きましょう。そこでシャワーを浴びて、わたしの洋服に着替えたらいいわ」

「・・・・・・・・」

祐子はマリーを縛っている縛り紐を切った。マリーは一人では立ち上がれなかった。祐子がマリーに手を貸して立たせた。祐子はマリーの脇を抱えるようにして、自分の部屋に連れて行った。2人は言葉を交わさなかった。マリーは祐子の言うようにシャワーを浴び、祐子の差し出した一張羅に着替えた。

「マリー、自由にしてあげます。どこに行ってもいいわよ」

「祐子、許して。わたくしが悪かった。苦しんでいる人達を見て、やっと気が附いた。わたし、悪いことしてしまった。わたしは死ぬ。お詫びする」

「マリー、あなたは気が附いたのよ。死んではいけない。今度は二つの種族を仲良くさせるために働いてください」

マリーは祐子の手を取ると、まるでナイトのように片膝を附いて、祐子の手にキスをした。

「わたし、あなたのため、残りの人生、捧げます」

マリー・ジュベステルは去った。暫くして、ピピと兵士が大慌てで祐子の部屋に飛び込んで来た。マリーが逃げたと喚いている。祐子はマリーを許したことを説明した。そして、「マリーは罪を償うために、我々のために働くはずだ」と言った。ピピたちは納得がいかないといった顔をしていたが、祐子の確信に満ちた態度に圧されて引き下がった。その日の午後、祐子は看護婦と、兵士を集めて講演を行った。タイトルは「愛と許し」だった。翌日、祐子はピピを連れてキヴエに向かった。意識に悲しみの波が押し寄せてきて、今にも押しつぶされそうだった。しかし種族葬後の復興のためにはやらなくてはならないことだった。あの襲撃の後で、キヴエの病棟には各地の傷病者が移動して来ていた。もともと、ここに居た病人は、襲撃でほとんど殺されてしまった。キヴエに着くと、祐子は津波のように押し寄せてくる慟哭する感情を飲み込んで、傷病人を見舞った。皆、ママユウコに会えることで胸をときめかせていた。どの病人も祐子が手を握ると涙を流した。祐子は自己をむなしくしエネルギーのパイプ役に徹することを意識した。午後、祐子はバラックが使っ

ていた部屋で休むことにした。部屋に入ってドアを閉めると、それまで抑えていた激しい悲しみが襲ってきて、嗚咽を押しとどめることができなかった。祐子は泣いた。ベッドに凭れるように^{うつぶ}俯せて泣いた。涙にかすむベッドの脇にバラックが姿を現し、自分を抱き起そうとしているように感じた。バラックは優しい声で囁いた。

「I love you, Yuko. I never forget you for all eternity. Live this life strongly for all people and our son.」(君を愛しているよ、祐子。君を永遠に忘れない。この生を人々と我々の息子のために強く生きろ)

バラックの愛に触れ、祐子は感情の落ち着きを取り戻してきた。

少しするとドアをノックする音がした。祐子は涙を覚られないように、毅然とした態度でドアを開けた。一人の兵士が立っていた。キガリのキャンプに祐子を訪ねて日本人が来たと言った。UTIMIとKASHIMAという男性2人と3名の女性だと言った。祐子は眩暈がして倒れそうになった。もう、彼らの前に姿を現すことはできない。自分は身重の体になっている。祐子は詳細について訪ねることはしなかった。兵士はコーヒービジネスの話だと言った。祐子は留守を装うことにした。兵士が去ると、祐子はあの不思議なボールをポケットから出して机の上に置いた。ボールはゆっくりと元の大きさに戻っていった。祐子はこのボールが賢たちとのコミュニケーションに使えることに気づいていた。ボールの上のシールを剥がして、ビニールの切片を貼り付け、そこにメッセージを書き込んだ。

「わたしは元気です。わたしはもう以前の祐子ではありません。ここの国の人たちと生きることにしました。どうかわたしを探さないでください」

祐子がトイレに行き、戻ってから机の上を見ると、いつの間にかボールは消えていた。翌日は湖のほとりに埋葬した犠牲者の墓に参った。新たな悲しみが襲ってきた。バラックの墓では1時間ほど黙想を行った。その日の晩、祐子が夕食を済まして部屋に戻ると、頭の中に懐かしい感情が蘇ってきた。祐子は賢が近くに居ることを意識した。賢に話し掛けてみることにした。

「あなた、わたしよ。分かるかしら？あなたがわたしを探しに、ここまで来てくれたと連絡があったわ。ありがとう。とっとうれしくて、涙が流れるわ。あなたに会いたい。今すぐにでもあなたの胸に飛び込んでゆきたい。そして、皆さんにもお会いしたい。でも今はそれができないの。わたしはもう、以前のわたしじゃないわ。もう以前の自分には戻れないの。わたしには自分という意識が無くなったの。ここの人たちは悲惨よ。あのジェノサイドの後の苦しみの中に生きているの。わたしは皆と一緒にここを天国にするの。それまでここで生きるわ。どうか、わたしを探さないでね。あなたに会ったら、ここの人たちを見捨てることになってしまう。どうか、わたしを探さないで。お願い！」

賢の声が頭に響いて来る。

「祐子、無事なんだな？お前が苦しみの中に自分自身を投げ込んで、周りの人々を導いているのが分かった。お前がそれほどまでに言うのなら、もうお前を探さない。だが、一つ教えてくれ。ママユウコというのはお前のことか？そこで、お前が何をしているのか教えてくれ。それから、俺たちに、何かできることは無いのか？直ぐ近くまで来ているんだ。お前の為にできる限りのことをさせてほしい」

祐子はこみ上げてくる涙を堪えて、応えた。

「あなた、ありがとう。あなた、もしできるのなら、世界中の国々に、わたくしたちを救ってくれなくてもいいから、手を出さないでほしいと伝えてほしいわ・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうよ、わたしはママユウコと呼ばれているわ。わたしはここで看護婦の責任者をしているの。それと首長のサポートをしているわ。この身にブチ族の首長の子供を宿しているの。だから、あなたには会えないの。ごめんなさい」

祐子は心が打ち震えるのを覚えた。それから暫くして再び祐子の頭に賢の声が響いた。

「祐子、聞こえるか？いま、ここには亜希子、鹿島さん、愛子、そして田辺さんが居るんだ。みな、お前を救うために来た。皆、絶対にお前を救い出すと言っている。それでも皆に会わないのか？」

祐子の胸は今にも張り裂けそうだった。

「あなた、ごめんなさい。わたくしを苦しめないで。今はこの道しかないの。わたしも皆に会いたいわ。だけど、ルワンダの人たちを救うことのほうが大切なの。ごめんなさい。あなた、愛しているわ。皆のこともとても愛しているわ」

直ぐに賢から応答が返ってきた。

「分かった。もう、会おうなんて言わない。だけど、今後このボールで交信することだけは続けよう・・・・・・・・・・どんなときでも意識を投げ掛けてくれ。俺はいつもお前に意識を向けているから」

祐子は襲撃のあった日の朝、ボールが赤色に速い点滅を繰り返していたのを思い出した。あの時は自分たちを祝福していると思ったが、実は危険が迫っていることを知らせていたのだということを知った。

「あなた、ありがとう。愛しているわ。とっても」

「おれも、愛しているよ。永遠にお前を愛している。たとえお前がどこに居て、何をしていても、どんな風が変わっていても関係ない。お前の使命が達成されたら、また一緒に生きよう」

「はい、あなた、待っていてね」

祐子は堪えきれずに溢れ出てきた涙を右手で拭った。祐子はその翌日もキヴエで患者を看護し、兵士を鼓舞し、看護婦達を助けた。午後になって祐子が部屋で休んでいると、兵士がやって来て、「日本人がコーヒーマジックの話をしたいと言って来ている」と言った。祐子は窓から、外を覗いてみた。体に熱い血が流れるのが分かった。賢と亜希子そして愛子と鹿島の姿があった。祐子の目から涙が零れた。直ぐに賢の胸に飛び込みたかった。しかし、祐子は耐えた。祐子は1枚の紙にメッセージを書いた。

「みなさん：日本からはるばるいらしてください。でも、わたしは皆さんにお会いできません。ですから、あなたたちのおられる場所には居ません。もう、わたしを追わないでください。賢さん：愛しています。あなたの元に駆けつけたいのですが、どうやら、これがわたしの生きる道ようです。約束は守ります。必ずあなたの元に戻ります。亜希子さん：あなたを愛しています。わたしもあなたに会いたいです。

「祐子お姉さま、わたくしにも祐子お姉さまのお手伝いをさせて頂けないでしょうか？一旦日本に戻りますが、直ぐに帰って来ます。そして、祐子お姉さまと一緒にルワンダで生きてゆきたいのです」

「亜希子さん、あなたの気持ちは尊いと思うわ。でも、あなたにはご両親がいらっしゃるでしょう。ご両親の元で生きること、それがあなたの運命なのよ」

「いいえ、わたくしはもう両親と一緒に生きることはできません。苦しんでいる人々を助けるために生きます。祐子お姉さま、お願いですから、わたくしにもお手伝いさせてください」

「分かったわ。でも、一度日本に帰ってからね。お父様やお母様とよく相談してからになさいね」

「分かりました。わたくしは必ず戻って来ます」

「亜希子さん、ごめんなさい。もう、巡回に出なくてはならないの。お元気でね。賢さんにもよろしく伝えてね」

賢からのメッセージが送られてきた。

「祐子、くれぐれも自分の身体を大切にしろよ。また連絡するからな」
祐子は溢れ出る涙を右手で拭った。

バマコ

賢たち一行がアブジャの空港に着いたのは昼過ぎだった。飛行機を降りると熱気が体を包んだ。湿度が高いようだ。4人は覚悟していたが、蚊除けのための長袖と長ズボンでは暑さが堪えた。アブジャ空港は、こじんまりとした空港で、キガリと同じように、やはり首都という感じがしない。しかしどこも清掃されていて4人は心地よい印象を受けた。空港から表に出て、走って来たミニバンのタクシーを捕まえてチャーターした。タクシーは旧式の日本車のライトバンだった。運転手はこれまで出会った黒人の中では最も背の低い、目のギョロっとした男で、口ひげを生やしている。行き先のホテルの名前を言うと黙って頷いた。賢が運転

手を手伝ってタクシーに荷物を載せ助手席に乗り込むと、運転手は全員が乗ったのを確認もせず、車をスタートさせた。最後に乗り込んだ梓がドアを閉める前に車は動き始めていた。賢が「Be careful!」と言った。運転手は賢の方を向いてにやりと笑っただけだった。空港から幹線道路に向かう道路には街灯が整然と整備されていて、空港へのアプローチの道路はきちんと体裁を保っている。建物もちらほらと見えるが、意外に形が整っているように見えた。4人はほっとした。10分ほど走ると一般道に入った。路面は整っている。交差点には信号も設置されていて、住宅も乱立していない。キガリよりずっと安心できると賢は思った。車は街から外れて郊外に向かい始めた。梓がホテルの位置を確認してあったので、その方向が可笑しいことに気付いた。梓はさも普通の会話をしているかのような口調で日本語で賢に言った。

「こちらの道は可笑しいですね。賢さん、警戒したほうがいいですね」
賢も普通の会話を装って応えた。

「そうですね。危なそうだから、僕が合図をしたら、僕の横の人の頭を後ろから思い切り殴ってください」

「わかりました」

「それから、伏せるように言ったら、3人とも体が外から見えないように伏せるんですよ、ははは・・・」

賢は運転手に気付かれないように平静を装いながら、外の気配と運転手の挙動に意識を集中した。5分ほどすると、案の定、車は遠方に立っている3人の男達の方向に向けて突き進んで行った。立っている男達は、覆面をしている。運転手が右手で何かを掴んだ。賢はそれが拳銃であることを知った。賢は運転手が拳銃を持ち上げると同時に叫んだ。

「今だ」

梓が運転手の後頭部を思い切り殴った。

「ぎゃっ」

運転手は悲鳴をあげると、前に突き出されて、拳銃を手から放した。その隙に賢は運転手の体をドアに押し付けた。運転手はハンドルを離し、ブレーキを踏んだ。車は道路の縁を擦るようにして急停車した。3人の

男の居る場所まで100メートル程だ。前方から男たちが駆け出して来た。梓がもう一度運転手の後頭部を殴った。「ううっ」賢は運転手の方に身を投げ出し、右手を伸ばして運転手側のドアを開けると、運転手を外に押し出した。運転手が大声で喚きながら外に転げ出た。そのとき拳銃も一緒にドアの外に落ちてしまった。ほとんど同時に賢は自分が運転台に移りドアを閉めた。そのままハンドルを握り、車を走らせた。狭い一本道なので、ユーターンはできない。賢は3人の男の走って来る方向に向けて思い切りアクセルを踏み込んだ。車は猛スピードで3人の男達めがけて突き進んだ。男たちは事態が変わったことに気付き、飛び退いて車を避けると、走り来る車に向けて拳銃を構えた。賢は叫んだ。

「全員体を伏せろ」

男たちの横を通過するとき「パンパン」という拳銃の音がしたが、車には当たらなかったようだ。賢は暫く車を飛ばしてから横道に入った。

「賢さん、格好よかったですよ」

梓が言った。

「強盗だな。梓、君のおかげだ。何とかホテルを捜さなくては」

不案内の道を街に戻るのは一苦労だった。亜希子と愛子は震えていたが梓がホテルの建物の説明をすると2人も必死になって建物を探し始めた。愛子が遠方に微かに見えるビルの影を捉えた。やがて影は2つ、3つと増え、それが街であることが分かった。ホテルにチェックインできたのは5時過ぎだった。中に入ると、暑さから解放されて、やっと生きた心地が蘇ってきた。4人は大きく深呼吸をした。賢は強盗の復讐を警戒したが、車はむしろ意識的に目立つ場所に停めた方が安全だと判断した。ホテルのフロントに強盗に出くわしたことを説明したが

「I'm sorry, we couldn't be involved in it.」(すみません、我々はそのことには関与できません)

とすげなく言われてしまった。4人は先ず、チェックインした。一旦部屋に入ってから賢と梓はフロントに戻った。梓が警察に連絡して欲しいと要求した。フロント係はあまり気乗りがしない様だったが、梓と賢の執拗な依頼に折れて、しぶしぶ警察に電話を入れた。それから10分ほ

どで警察がやって来た。梓がフロント系の通訳を介して、英語で事情を説明した。警察官は賢と梓のパスポートを調べ、駐車してあるライトバンのナンバーをチェックした。銃撃を受けたとき、賢たちは銃弾がどこにも当たらなかったと思っていたが、車体の後部に弾痕があった。警察はそれも手帳に記録していた。同行した警察官の一人は英語で『How to contact with POLICE』（警察への通報方法）というタイトルと電話番号の書かれた名詞サイズの紙を賢に渡すと、ライトバンを押し出し自ら運転して持ち帰った。

「これで、強盗もそう簡単に復讐できなくなったわ」

梓が言った。賢もその通りだと思った。ふたりは握手を交わしながら、顔を見合わせて微笑んだ。ふたりは直ぐに部屋に戻った。亜希子も賢の部屋に居た。4人で今後の計画に附いて話し合った。ドゴン族を訪問した後、エジプトに寄り愛の神ハトホル神について調べるかどうか、その後でケルトの調査に行くかどうかポイントだった。賢はエジプトに関しては直接現地調査をする必要はないと言った。確かにエジプトには神聖幾何学や霊的にアセンションに導く秘儀を伝承してきたという過去がある。しかしこれまで、あまりにも多くの調査が行われてきていることと、その調査結果は書籍などで容易に調べられること、またハトホル神についても墓所や神殿の彫刻を調べる程度の成果しか期待できそうもないこと、そして何よりナイル川の両岸を調べるだけの時間的余裕がないことを説明した。梓は賢の考えに異を唱えることはなかった。ケルトに関して、梓はMIプロジェクトとの関連性が今ひとつはっきりしないと。賢もそのことは心の隅に引っ掛かっていた。賢は考えた。「確かにケルト人は獰猛で戦を好む人種だったと謂われている。戦場においては死を恐れることはなかった。首刈りなどのおぞましい一面も持っている。ドルイド僧は神に人身御供を捧げるという習慣さえあったと聞く。人間の意識を変革し、心の平安を得ようとするMIプロジェクトの目的とするところと対峙する部分も多い」

キガリでの日程がオーバーしていたこともあり、結局エジプトとケルトの調査は取り止めにして、マリでの調査を終えたら直接フェニックスに

行くことになった。今後の行程はすべて梓の計画通りに実施することになった。当初の計画から大幅にずれてしまったが、それもやむを得ないと賢は考えていた。その日はホテルの部屋から出るのは止めた。ルームサービスに連絡し夕食を賢の部屋に持って来てもらった。賢と愛子の部屋には丸テーブルと2脚の椅子があったが、賢はテーブルをベッドサイドに寄せ、賢と愛子がベッドに腰掛けて食事をし、椅子はサイドデスク側に置いて梓と亜希子がそこに腰掛けてデスク上で食事をすることにした。テーブルが小さかったので、部屋に届けられた皿はすべて、一旦サイドデスクの上に並べてもらった。女性達は食事の支度をしようと思っ落ちて着かないようだったが、ナイフとフォークを並べ、ルームサービスのボーイが持参したコーヒーポットからコーヒーをカップに注いで並べる程度のことしかすることは無かった。食事をしながら梓が言った。「リーダー、ルワンダの印象と人類の意識という点で気付いたことをまとめたいと思います」

賢もそう思っていた。やはり梓は思考パターンが自分に近いと思った。

「うん、僕もそう思っていた。食事の後で、ふたりでまとめよう」

亜希子が言った。

「わたくしも仲間に入れて頂けないかしら」

愛子も仲間に入りたいと言った。

「これは仕事だけど・・・でも、2人の意見も是非聞きたいね。2人とも、感じたことを教えてくれるね？それじゃあ、一緒に検討会をしよう」

梓も同意した。食事が済むと亜希子と愛子は食器を片付けて、部屋の外に出した。梓が自分の部屋にノートを取りに行くと言った。賢は念のために梓に付き添って行った。

「梓、君が居てくれて、本当に助かるよ。まるで、君は僕の心を読んでいるようだ。僕の考えることと同じことを君も考えているように思う」

「賢さん、それは賢さんの言うシンクロシティじゃないですか？わたくしが自由に発想できるのは、こうしていつも賢さんがわたくしを守っていてくれるという安心感があるからです」

「シンクロシティか、そうかもしれないね。目的も手段も同じなんだから、同じような思考パターンになっても決して可笑しくないわけだ。それにしても、僕達の考えはよく合っていると思うな」

梓は微笑を返した。賢達が部屋に戻ると4人は直ぐにレビューを始めた。賢が口火を切った。

「ルワンダで、どうしてジェノサイドが起きたか考えてみよう」
皆暫くの間瞑想をし、そして頭に浮かんで来る思考を見つめた。梓が言った。

「わたくしは、ジェノサイドは人間の欲望が生み出した誤った判断に基づいた行動だと思います。ヨーロッパの一部の国が自国の利益のために民族間に憎しみの感情を沸き起こさせ、それを鼓舞させたために、こんなことになったんじゃないかと思います。飛行機が落ちて大統領が亡くなったというのは引き金で、本来なら変な噂が広がるのを抑えるのが政府の役目だと思います。ルワンダが国家として、しっかりとした法律や制度を持っていれば、ジェノサイドは防げたんじゃないかと思いますが、賢さんはどう思いますか？」

「社会と云う立場からは君の考えは正しいと思うけど、僕はジェノサイドは何時でも、どこでも条件が揃うと起きてしまうと思うんだ。ジェノサイドに加担した人間が発狂状態になっているように見えるのは、それらの人たちの行動が感情にリンクしてしまうからで、正常な人の意識からずれているからじゃないかと思うんだ」

梓が言った。

「それじゃあ、ルワンダのようなことは日本でも起きる可能性があるとお思いですか？」

「うん、そう思う。ある一つの強いエネルギーを放つ感情が生じ、その感情に多くの人たちが同調してゆくと、そういうことが起きる可能性があると思う。我々のこれまでの認識で謂うと、この世界は物質も精神もすべて振動で出来ているだろう。その振動に同調（同一周波数の共振）すると、あらゆることが生じる可能性がある。それが1種族を憎み、抹殺したいという方向に作用すると、ジェノサイドのようなことが起きる

可能性があると思う」

それを聞いた愛子が言った。

「賢パパ、それじゃあ、法律や規則はどうなるの？」

「人間の感情の高まりは法律や、規則では抑えられないと思うよ。発狂状態になると、すべてが無視されると思うんだ」

愛子が言った。

「それなら、どうしたらジェノサイドは防げるのかしら？」

「僕が思うには、すべての人間が意識的に生きれば、そういうことは決して起きないと思う。先ずそう謂う発狂したような感情の状態を作り出す場を無くすことと、皆が自己の意識に基づいた行動をとるように努力することで防げると思うよ」

梓が言った。

「それでは、ルワンダでは意識的に生きていた人たちがいなかったのかしら」

「いや、いたと思うけど、発狂状態にある人たちのエネルギーがあまりに大きすぎたから、それを抑えることができなかつたんじゃないかと思うよ」

黙っていた亜希子が言った。

「人間はなんて悲しい生き物なんでしょう。相手のことを思えば、あんなひどいことはできないはずなのに」

「慈悲の心が無くなってしまった結果だな。自分の外側に捕らわれた結果だ。人類は深層の意識に繋がるように、内側に向かうべき段階に来ているのにな」

「わたし達もあんなふうになってしまう可能性があるのかしら？」

「愛子、おまえにも、ここにいる誰にもそんな可能性は無いと思うよ。

我々は愛と慈悲を拡大させて、意識的に生きているから・・・」

「リーダー、ジェノサイドの起きたときの人々の意識はどうだったのでしょうか？」

梓が聞いた。

「初めの内は、そういう動きを押し留めようとしていた人たちも、身の

危険を感じて、その場から逃れたいという意識のみが強く働いたんじゃないかな。そこに居たら殺されてしまうから」

亜希子が言った。

「何と悲しいことでしょう。何と哀れなことでしょう。もしわたくし達がその場に居たら、どうなっていたでしょうか？」

「それは面白い問題の投げ掛けだね。亜希子はどう思う？ 梓や愛子は？」

「わたくしは、襲ってきた人たちに止めるように頼みます。殺されても仕方ありません」

亜希子の真剣な応答に、愛子が済まなそうに言った。

「私もそう思うけど、多分怖くて逃げちゃうわ」

梓は毅然としていた。

「わたくしは最後まで、戦います。たとえ直ぐに殺されてしまっても、力尽きるまで戦います」

賢が言った。

「僕も梓と同じだ。だけど、亜希子の選択は美しく、愛子の選択は賢いと思う。人それぞれでいいと思うよ。祐子ならどうするだろう」

一瞬、皆黙り込んだ。亜希子が言った。

「祐子お姉さまなら・・・その狂乱したジェノサイドの真っ直中に入っていかれて、ご自分も一緒にその苦しみを受け取り、狂乱を沈めようとされるのではないかと思います」

「それが祐子だな。多分・・・僕はこのルワンダが今度のプロジェクトの最も難しい点、多くの人びとの考え方を変える方法に示唆を与えてくれるように思うけど、君達はどう思う？」

梓が応えた。

「人の心を変える困難さを乗り越えると言う点では、とても役に立つと思います。もっとも、それが日本の国にも適用できるかどうかははっきり分かりませんが・・・」

「そうだな、僕も同じ考えだ。しかし、一つの方法として参考にはなる。ところで、具体的にはどうしたら人びとの心を変えられるかだけど・・・

・」

亜希子が言った。

「わたくしは、やはり愛しかないと思います」

「それは確かにそうだが、具体的にはどうしたらいいかだ」

「祐子お姉さまが、その答えを教えてくださいました。祐子お姉さまは、今、人々が間違った方向に進まないように、ご自分を省みずに人々を導いていらっしゃいます。何と神々しいお方でしょうか。ご自分をお捨てになっておられます。もし祐子お姉さまがいらしたら、そこでは殺戮は起きないと思います」

「うん、僕もそう思う」

梓が言った。

「それはどういうことでしょうか？」

「祐子からは自分という概念が消えていて、愛と慈悲のみで生きているから、そういう人の居る場では殺戮が起きるようなことは無いと思うんだ。殺戮の動機がなくなってしまうから」

また、全員黙り込んでしまった。亜希子が言った。

「わたくしも、祐子お姉さまと一緒にルワンダで人びとを助けるために働きます。必ず、あそこに戻ります・・・えーん、えーん」

亜希子が泣き始めた。賢は亜希子の近くに寄って肩に手を掛けた。

「亜希子、泣くな。僕達が祐子の友達でいられることに感謝しよう」

4人は暫くの間しんみりと黙り込んでしまった。

朝の便でアブジャ空港を飛び立つと、全員ほっとした。定員50人ほどの小さなプロペラ機だった。遠方に積乱雲が見えた。機体は時々大きく揺れたが、愛子を除いてそれほど恐怖心を抱いたものはいなかった。愛子は頭を前席の背もたれに押し付けるようにして下を向いていた。飛行機が揺れる度に、「ひえーっ」と声を上げていた。同乗していた現地の人たちは愛子の様子を見て、くすくす笑っていた。アブジャと1時間の時差があったので、10時近くにバマコの空港に着いた。ここからは厳しい環境に耐えなくてはならない。蚊に刺されないように4人は梓が持

参した蚊除けのスプレーを手足に吹き付け、顔には防虫のクリームを塗った。梓の指示でアフリカ行きが決まってから直ぐに抗マalaria薬メフロキンの服用を開始した。日本を出国する前に複合ワクチンの予防接種を受けて来ていたので、後は自分自身で蚊に刺されないように注意するだけだった。梓は蚊取り線香と電気式の蚊取り器も持参していた。考えられることは全部行ったと思っていたので、梓は万が一誰かがハマダラ蚊に刺されても、直ぐに重篤な状態に陥ることは無いと考えていた。4人は空港を出て、その日のうちにバスでモプティへ移動することにした。街中を通り抜ける時、いやがうえにもバマコの混雑振りを体験せざるを得なかった。まるで人の波が車に向かって押し寄せてでも来るかのような混雑だ。バスは遅々として進まなかった。10分掛けてやっと10メートルほど進んだだけだった。前方で小競り合いが始まっていた。車のボディをハンマーのような金属で打ちつけた男が居た。邪魔な車に腹を立ててやったことだった。車の運転手が降りて来て、その男と取っ組み合いのけんかになった。しかし、後続の車の運転手は巨大な体格の黒人男性で、その男が仲裁に入ったのでやっと収まり、車が動き始めた。この混雑では人びとが平常心を保つことが究めて困難なことが、容易に推察できた。ほとんど接するほど接近して歩いている人々にストレスが溜まらないはずはなかった。街中を抜けるのに30分ほど要した。街を外れると混雑は減ってきたが、今度はでこぼこな道に悩まされ始めた。座席のクッションはスプリングが臀部に食い込んで来て、バスの乗り心地はすこぶる悪かった。おまけに、40分ほど走るとエンストを起こしてしまった。運転手はバスから降りて、携帯電話で連絡を取っていた。1時間ほど待たされた。小型ライトバンが何やら運んで来て、バスの後部を開け部品の交換を行っているようだった。4人はただじっと待つしかなかった。8人の現地人が乗っていたが誰も文句も言わずに黙って席に座っていた。どうやら、エンストは珍しくないようだ。漸くエンジンがかかって、バスは走り始めた。そこからは大きなトラブルは無かった。気温が高く、じとじととしていて乗り心地はよくなかったが、車窓から見える自然は素晴らしかった。ジャングルの中を走り、途中からニジェー

ル河の河畔を進んだ。セゴウという街で少し休憩し、パンと飲み物を買った。セゴウはあまり目立った建物も無い町だった。そこがまだ工程の1/3程度の場所だと梓が言った。車の振動に4人とも疲れ切っていた。モプティのホテルに着いたのは夕方の4時半を廻った頃だった。出来たばかりの4階建ての新しいホテルだった。ホテルの周辺には土壁の建物が点々と建っていて、そのうちのいくつかもホテルの営業をしているようだと言った。

「よかった。あんな土のホテルには泊まりたくないもの」
愛子が言った。愛子はエントランスを入ると、辺りをきょろきょろ見廻している。賢が何をしているのかと聞くと、蚊を探しているんだと言った。ホテル内には蚊は見当たらなかった。

「愛子さん、蚊は夜中に襲って来るらしいですよ」
梓が言った。

「いやー！わたし、心配で眠れないわ！」
「大丈夫ですよ。このホテルは大きいから、多分蚊帳を貸してもらえますでしょう。フロントに言ってみましょう」
チェックインは梓が代表で行った。手続きが済むと梓はフロントの女性に蚊帳のことを聞いた。梓の予想通りホテルは希望する客に対して蚊帳の貸し出しをしていた。梓は4枚の蚊帳を借りた。フロントの女性はメッセージが来ていると言って1枚の紙を梓に渡した。メッセージは出発前に日本で予約し、キガリを出るときに確認の電話を入れておいた日本人のガイドからだった。ここでは日本人ガイドは稀有な存在だったが、ガイド料は現地人ガイドの倍だった。それでも、賢と梓は日本人ガイドを選んだ。それは言葉の問題だった。メッセージメモにはこう書いてあった。

「Please hand this message to Japanese Lady Miss Tanabe who will arrive here at around 5:00pm today.(今日の午後5時頃に来る日本人女性の田辺さんにこのメッセージを渡してください。)

田辺さん、こんにちは、わたしは斉藤弘と申します。このたびはわたしをドゴン族のガイドに指定してくださって、ありがとうございます。男

性一人、女性3名のグループ様でよろしいですね。わたしは午後6時頃にここのホテルのロビーでお待ちしております。詳しいことはそのときにお話させていただきます。」

梓はメモを読むと、うれしそうに賢に渡した。賢は頷いた。ここでも日本人に案内してもらえることに胸を撫で下ろした。亜希子も愛子も喜んだ。午後6時までの間に全員シャワーを浴びようということになった。チェックインの後、皆部屋に向かった。何時ものように賢と愛子、梓と亜希子が同室だった。4人とも部屋に入るや否や先ず蚊帳を取り付けた。ベッド全体を覆うタイプだった。梓達の部屋では蚊帳を張ると亜希子が初めにシャワーを浴びた。その間に梓はスーツケースを開けて、着替えや洗面具を取り出した。一番注意を払っていたはずの梓だったが、化粧品を探しているときに左手の甲を蚊に刺されてしまった。刺されて直ぐに気付いた。梓に恐怖にも似た戦慄が走った。蚊は梓の手で叩き潰され、左手の甲に死骸と赤い血痕を残した。ハマダラ蚊だ。梓は蚊を潰すと、次第に顔面蒼白になってきた。それでも冷たくなった背筋を伸ばして、スーツケースからビニール袋を取り出し、潰した蚊を中に入れ、袋をスーツケースの内ポケットに入れた。それから急いで洗面所に駆けて行き、刺されたところを口で吸いだして唾を吐いた。何度も、何度も繰り返して、とうとう唾液も枯れてしまった。梓は持参した抗マラリア薬を備え付けのミネラルウォーターで飲んだ。梓の鼓動が激しくなった。不安に押し潰されそうな感覚だった。

「梓さん、お先に、失礼いたしました」

梓の蒼白な顔を見て、亜希子が言った。

「梓さん、どうされたのですか？」

「蚊よ。蚊に刺されちゃったのよ！」

「えっ!? 蚊がいたんですか? 本当に刺されたのですか!? どうしましょう。直ぐに病院に行かれますか？」

「いいえ、もう薬を飲んだわ。でも、効くかどうか分からないけどね。それに、今行っても分からないわ。潜伏期間もあるし・・・」

亜希子は梓が早口になっていることで、動揺している様子を感じ取っ

た。梓は急に元気がなくなった。マラリアの感染に対して備えていたが、いざ自分に感染の可能性が出てくると、その不安は絶頂に達していた。亜希子に押されるように促されて、梓はシャワーを浴びた。シャワーの後、タオルを体に巻き付けていたが、濡れた髪を拭かないまま部屋に戻って来た。意識がそこに無くなっているのが亜希子には見て取れた。

「梓さん、救急病院に行ってみましょう」

「……いいえ、様子を見るしかないわ。わたくしはマラリア診断簡便キットを持って来ていますから、後で検査します」

亜希子が渡したもう1枚のタオルで髪を拭きながら梓が応えた。抗マラリア薬を服用しているので、危急の事態になることがないことは梓が一番よく知っているのだが、恐怖心はそれをも凌駕してしまっているようだった。翌日早朝、斉藤はタクシーに乗って来た。4人はリュックサックを背負って出掛けた。梓はいつものエネルギー感を感じられなかった。このホテルにはまた明日の夕方戻って来る。7時頃ホテルを出た。ニュータウンにあるバニ川の栈橋まで行くと7、8人が乗れる小船に乗り込んだ。川には朝から投網をしている人々がいる。少し進むと全く人影が無くなった。木々と畑、草々、変哲の無い川べりを眺めながら進んだ。昼近くになると、斉藤はリュックサックの中からサンドウィッチとミネラルウォーターを取り出し全員に配った。今日の昼食だった。9時過ぎにゴミナという土地に着いた。ここには泥でできたイスラムのモスクがあると斉藤が言った。そこからおよそ1時間して、フラニ人のキャンプのあるセンセ村に着いた。その村も通り過ぎ、昼食を取りながら舟はさらに進み、川から運河へと入った。人々や荷物を乗せた運搬舟が何隻も通り過ぎてゆく。舟上の人々は皆手を振ってくれる。4人とも、自然に親近感を覚えた。昼前にコナに到着した。舟から降りると、港沿いに市場が立っていて人々で賑わっていた。斉藤は1台のタクシーを呼んだ。タクシーとは呼べないほどのポンコツ車だ。乗り心地は極めて悪かった。梓の顔色が勝れない。1時間半ほどの悪路を、暑さと振動に耐えながらやっとドゴンの村、ソongoに辿り着いた。断崖の下にとんがり帽子のような黒い屋根を載せた童話の世界に

出てきそうな家々が伺える。車のスピードを落とすと、子供らがしつこく「カドー」「カドー」と言いながら物乞いに近寄ってくる。賢は同じことをするモニュメントバレーのナバホの子供達を思い出した。そこから車でドゴンの奥地へと進んだ。道が悪だけでなく、山道で坂やカーブが多い厳しいドライブに全員疲れてきた。宿泊地のサンガに着いたのは3時半過ぎだった。ドゴン族の村は人々も親和的で、危険性は全くと言ってよいほど感じなかった。辺りに土壁の住居がぼつぼつと建っていた。斉藤はこの地形や、住民に精通しているようだった。灌木の林を抜けて更に奥に進むと、山の斜面に突き当たった。山肌に沿って走りながら斉藤が言った。

「この地域はそれほど危険じゃあないですよ。滅多なことで盗賊などには遭いません。やはりある程度豊かな地域は危険度も低いでしょうね」

不安を抱かせないように配慮してくれているのかと賢は思った。訪問したドゴン族の住居は山裾の平地に作られていた。既にアポイントメントが取られているようだった。初めに何人かの住人に会って挨拶をしてから、切り立った岩壁にある1軒の洞窟家屋に案内された。そこにドゴン族に口伝で伝えられてきた神話や思想を説明してくれるオゴンと呼ばれる首長がいるとのことだった。オゴンは額に深い3本の溝が刻まれた、顔が黒光りしているような印象を与える老人だった。眼光の鋭さが、3人の女性を怯ませたが、賢はその威厳に喜びを覚えた。斉藤の挨拶に続いて賢たちが辞儀をすると、オゴンが微笑んだ。その顔は4人の緊張を一気に解きほぐしてくれた。オゴンが現地語で話し始めた。低音で、ゆっくりとした話し方は、4人に時間の流れを忘れさせてしまうような心地よさを与えた。長音と単音がリズムカルに繰り返されているようで、まるで唄を歌っているようだ。4人は来る途中、斉藤から

「オゴンの話す言葉はシギの言葉と呼ばれていて、普通のドゴン語に比べ語彙数が1／4程度と少ないけど、聞いていると心地がいいんです。儀式のときなどに使われる祭儀的な言葉なんです」

と説明を受けていた。勿論3人の女性にはオゴンが何を話しているのか

全く理解できなかつた。ただ、賢だけが、自分の意識をオゴンの意識の方向に向けていたので、具体的な言葉としてではなく、イメージとして、話の内容を感受することができた。斉藤はオゴンが通訳のために、1節毎に間隔を置いて話してくれたので、その休止の間に日本語に翻訳して4人に説明した。

「*****」(わたし達人類はこの地球に試行として連れてこられました。ずっと彼方のシリウス星とその伴星からです。伝承される神話の中では人類は地球上で造られたと謂うことになっていますが、それは物質的形態作成についての話です。この地球には、もともと人類が住む環境は用意できていませんでした。神話には地球環境創造のプロセスが寓話化して述べられています。シリウス星のもの・・・ものと訳すのがいかがいかわかりませんがドゴンの人たちがノンモと呼ぶ存在です・・・そのノンモたちがもっと上の次元の意識・・・これはドゴンの人たちがアンマと呼ぶ存在ですが・・・アンマから、「地球を人類が住める環境にするように改造するので、その後でこの地球に人類を連れて来るように」と指示を受けました。地球の改造は先ず、岩から土に到るまでの大地とその風化循環手段の作成、水の特性設計とその循環手段の作成、火の機能設計とそのエネルギー伝搬手段の作成、生物が生きるための空気の充填とあなた方が風と呼ぶその循環手段の作成から始めました。それで、地球上での時間でおよそ10万年後にノンモ達がこの地球に人間の肉体を造って、人類の最初の人々男女4対8名^{ついで}を連れて来てその命を吹き込みました。はじめ地球に使者として来たノンモは3名でした。その前段階として、それより1万年ほど前に、彼らは動物、植物を作成して、この地球上に分散投入しました。それも何段階かに分けて、原生動植物から順次、高等動植物まで投入してゆきました。その頃のシリウスではおよそ300万人の人が生物を作ることに専念していました。あなた方が今見る植物のいくつかはこの頃にシリウス星で作られたものです。植物の花を見て何か感じませんか？そのデザインが、あまりにも見事になされているということに感心されると思います。それらの原型はすべてシリウスの人達^{ついで}が作り出したものです)

ここまで話して、オゴンが一呼吸置いたので齊藤も一息入れた。賢がオゴンに向かって日本語で質問した。

「動植物を造るということは意識でなされたのでしょうか？それとも、直接この物質世界でなされたのでしょうか？」

齊藤が賢の言葉を通訳しようとしたときにオゴンが言った。オゴンの言葉を齊藤は通訳した。

「*****」（意識と物質の境目は今の様にはっきり分かれてはいませんでした。まず概念を持ち、意識で設計して、物質次元に意識を投入すると、それが具体的に物質化されるというように行われました）齊藤が言った。

「質問は後にして、先ず、オゴンの話を最後まで聞きましょう」賢は頷いた。オゴンは再びゆっくりとした語調で話し始め、齊藤が通訳した。

「*****」（この地球における時間と空間というものはこの地球上の人間の意識が作り出しているのです。シリウス星では、この地球上のような時間や空間はありません。共通の意識では、時間と空間は全く無くて、個別の意識の中で、その人独自の時間と空間が作られます。だから、ある人にとっての1日がある人にとっては1年になったりしますし、ある人にとっての球場ほどの広さも別の人にとっては砂場ほどの広さにしか感じられません。この地球にシリウス星で作られた生物を移植する際には、時空のコントロールができる者に依頼して、その者が、人々の作り出せる時空間を無くして、シリウス星の伴星と地球とを重畳させ、その上にその生物を移植して、元のように地球とシリウス星の伴星を分離するという方法がとられました。後に人を移住させるときもそのように行われました。シリウスの伴星は現在のように白色矮星ではなく、赤く燃える存在だったのです。そう、物質と意識を統合すると、熱的な環境は存在の必要条件にならなくなります。しかし、初期の生物は物質偏重な体として造られたので、環境の温度特性の影響を受けました。人間は本来熱的な影響は受けない存在なのですが、その後の物理的肉体と霊的肉体の分離が生じてからは他の生物と同じように温度の影

響を受けるようになったのです。生物の設計では、最小単位を細胞にすること、そして、どの細胞にもすべて染色体を持たせ、その染色体にDNAという情報を埋め込み、それをコピーしてさまざまな生体を生成する方法を用いました。一つの個体の中でもこのDNAのコピー機能を用いて、生体の維持ができる仕組みを組み込みました。この方法がこの地球上に生物を生存させ、そして、ある一定の間隔で物質を入れ替える・
・・・つまり出生または発芽と死亡または枯死のプロセスを循環する形で実現させたのです。それらの情報はすべてDNAの中に情報として組み込みました。DNAの情報は今人間が考えているような物質的な情報のみでなく、物質とは異なるものに関する情報、たとえば精神や感覚、記憶方法などの形而上的な情報も同時に組み込んであるのです。生物を地球上にあまねく繁栄させるために、生殖というシステムを組み込みました。初めは雌雄同体としましたが、途中で分離が生じ、雌雄が別の個体に別れていきました。一方この地球自体はその核に鉄を多く含ませ、重力を大きくさせて人間が物質に縛り付けられるようにしたのです。そうしないと、新しいものや発見ができ難く、物質的な発展の元になるエントロピーの拡大路線を設けることができなかつたことと、新しいものを生成したりそれを認識したりさせるためには、どうしても意識の集中が必要で、重力が強いとそれが起こりやすくなるからなのです。その反面、執着が起きやすくなり、意識が固定化しやすくなります。これは問題点でもありましたが、この段階の人間には、この地球の環境条件が最適だということになったのです)

ここで、また一呼吸置いた。今度は、賢は質問をしなかつたが、愛子が独り言のように言った。

「だけど、知能の進んだシリウス星の人たちが、なぜわざわざこの地球に人間を送り込んで試行を行ったのかしら？」

それを聞いた斉藤は、それをオゴンに伝えた。オゴンは言った。

「*****」(お嬢さん、あなたもわたしも、シリウス星の人たちも皆同じなんですよ。一つなのです。我々は自分に与えられている機能を使っていないだけです。だから、もっといろいろな経験をして、能力

を引き出し、レベルアップしたいのです。そして、最適なものを自分自身にフィードバックしたいのです。だから、全く違った環境の地球を新しい経験の場にしたいのです。分かりますか？)

愛子はよく理解できなかったが、小さく頷いた。オゴンがまた話し始めた。

「*****」(お嬢さんの言うように、今の地球上の人間は自分が孤立した存在だと思っています。そして、「すべての存在は一つ」と唱えている人も、どうして、そう言えるのか説明できていません。もともとすべての存在は一つなのです。分かりにくいでしょうが、すべての存在の核は共通なのです。核から周辺に向かうにしたがって、分離が起きて来ます。わたし達は、その核から最も離れたところで、ばらばらの個として生きています。そういう分離を起こりやすくしているのが、この地球の環境です。そうすることで、個々人の間に多様性を生み出させることができたのです。そのような共通の核を持つ存在のあり方は次元を変えると見えてきます。核が共通なことは簡単に分かります。多くの人間が美しいものは美しいと感じ、醜いものは醜いと感じ、音色にも同じような印象を覚えます。五感と謂われる機能もすべての人が同じような感覚として感じます。もし、同じ肉体構造でも、個人個人が別々だとすると、あるものが臭いと感じる汚物を別のものは芳香のように感じるかもしれないのです。そうすると、世界に混乱が生じてしまいます。残念ながら、今の地球上の人間の意識レベルではすべての存在の核が共通であるということを実感として感知できません。それができるようになるためには、いろいろな精神的な技法、たとえばYOGAや気功、修法などを行うか、瞑想によって、自分自身の内側の最も深いところに入り込むしかないのです。理解できますか？ シリウスの人たちは、すべての存在の核は共通で、その核のイメージにフィルターを掛けて意識で造られた空間に映し出したのが個々の人や存在なんだと知っていました。そして、この世界はすべての存在の共通の核全体を共通の空間として映し出したものだということも。だから、この世界を改善して変えてゆくために、すべての人間があらゆる経験をし、あらゆる可能性を核に埋め込む

ことを行う必要があるのです。しかし、現時点で、もしこの地球上の人間が、すべての人は一つだと自然に認識できるようになると、意識レベルの低いものが自己の存在の意味を失ったり、生きることに関心を抱かなくなったりして、体験の元になる地上的発展が無くなり、本来の目的が達成できなくなってしまうのです。だから、地球をこのような形態で存在させているのです。ここで、何か質問があればお答えします)

賢はオゴンの話している内容は全て自分の意識の中にある内容だと思った。そして、それがシリウスからもたらされたということに少し馴染めないような感覚を覚えていた。賢が言って斉藤が通訳した。

「このお話しは、以前ドゴンの宇宙哲学として紹介されていた内容・・・確かあれは神話的な内容のようでしたが・・・書籍なんかで紹介されていた内容より、もっと拡大されているように感じるのですが、当初よりこのようなことが伝承されているのでしょうか？」

「*****」(ヨーロッパやアメリカなど西側の人たちの多くが研究のためにこの土地を訪れました。わたし達はその方達にいくつかの表記を用いて説明しました。先ず、創造の概念の抽象的な記号ブンモン、その具象化のイメージを点で表したヤラ・・・丁度家を建てる時の家のイメージを示す敷石のようなものと捉えてくれればいいんです。それから、それを具体的な線のイメージで描いたトングと呼ばれる図・・・これは物を作るときの部品図のようなものです。それと、可能な限り写実的な絵であるトンイこういう表記を使って形成学的に彼らにこの世界の創造に附いて説明しました。しかし、彼らの概念には、見えない世界・・・つまり霊的な次元の概念が無かったので、それを物質次元に当てはめて、文字通りに解釈したのです。だから、世界に紹介されたドゴンの概念は動物や植物の創造を描いた神話のような形態になってしまったのです。それに気付いていたドゴン族の人はほとんどいませんでした。そして終に、宗教が入ってきました。特にイスラム教が入ってくると、もともとのドゴンの概念が湾曲されて、神として崇める主の様な存在がこの地球を作ったというように変化していったのです。旧来からのドゴンの伝承を理解していた少数の人たちは、その概念を自分

達で伝える方法を検討しました。それには先ほど言ったブンモン、ヤラ、トング、トンイといった表現を用いず、あるいは用いたとしても、その意味に具体的なイメージを結び付けて西欧的な、宗教や哲学で使われる表現を用いて説明することにしたのです。今まで、わたしが話したのは、もともとドゴンの地に伝わった神の降臨とフォニオと呼ばれる種の移植のプロセスを現代科学の概念で説明した内容です)

賢が応えて斉藤が通訳した。

「そうでしたか、このドゴン族の概念は、今僕達が探求し、近づいている概念に近いです。僕達は、すべての源は神から与えられたのではなくて、神の中に顕現したのだと考えています。その顕現が、写像としてこの世界を映し出していると考えています」

斉藤が賢の話を通訳してから賢に向かって言った。

「内観さん、かなり具体的なお話になっていますが、もう少しオゴンのお話を聞いてみませんか？」

賢も是非聞きたいと思った。梓は話の内容をレコーダーに録音していた。亜希子と愛子は話の内容より、周りに集まってきているドゴン族の人たちのことが気になるようだった。

「*****」(貴方、ウチミさんですか、貴方がおっしゃるような概念は、まだドゴンの中には確立できていません。この地球がシリウス人の試行の対象として創造されたということ、この点が非常に重要になってきます。シリウスの最もレベルの高い覚者アンマが芥子粒ほどの種子の中に、概念で世界を構築する仕組みを組み込んだのです。物理次元の世界はこの仕組みの元で、自動的に構築されていったのです。はじめは266のブンモンが組み込まれましたが、その266のそれぞれが266のブンモンを生成し、さらにそれがまた266のブンモンを生成するという形で瞬く間に世界は出来上がっていったのです。これは抽象的な概念ですが、物質次元と霊次元を合成して世界はできて行きました。具体的な形を創ることは直接のアンマの行為には無いのです。アンマはフォニオの中に仕組みを構築し、後は意志を作用させただけです。その後のトンイの図像に至る創造のプロセスは、図像の発展となって現れま

す。靈的原理の中においても実現されてゆくのです。ブンモンブンモンの段階で生命力であるニヤマニヤマが備わります。たとえば土のニヤマは家の隅石に宿っています。そのことを指して、家の角々のニヤマを持つといいます。家のトングトングは隅石の間の壁の作るレンガを表しています。トンイトンイの段階で生ある存在は息づき始め、靈的原理の中に組み込まれます。家のトンイは4元素を含む家そのものと同じなのです。ただし、家は生命の無い存在なので、家の魂はアンマアンマの手の下で初めのブンモンの中に留まることとなります。その代わり、家の魂は建物のひと隅の土中深くに置かれた不死という名の球根の形で図象されます。生ある存在においては現実における発展が平行に起こります。男から女の中に入り込む精液は子供の血というヤラヤラとなります。この精液が胎児に変化するとそれがトングであり、完全な形になった子供がトンイに相当します。人の4つの魂は4元素の集まりのヤラで、それが結合して一つになった人間がトンイになります。胎動を感じると女の胎が子を描いたこととなります。穀物に附いても同様です。穀物の成長過程も一連の図像と同一視されます。ブンモンを描くのは穀物の生命を描くのと等価です。ヤラは種子、トングは芽生え、トンイは茎が伸びてゆくのを表わしています。すなわちこの各種の表象は創造の段階を表わしていることとなります。大切なことはブンモンブンモンの段階でこれから存在することの予告が示されていることです。それは物理的な形態においてではなくて、その具体的な形態を構成する観念や機能からイメージできる概念のようなものです。ブンモンは擬似的な抽象化と言った方がいいかもしれません。一種のシンボリズムと言えると思います。ヤラからは具体的な存在の形態が表わされてゆきます。これは我々が通常ものを作るときに行っている、ひらめきから、図像化に向かう過程に似ています。と言うより、それと同じです。我々は気付かない内に、いつも創造のプロセスを実行しているのです。DNADNAに繋がる概念はアンマの卵のヤラです。卵の内部におこる生命の展開の形を示す、内的な螺旋をなしています。それは先ほど言ったように、266の点からなっていて、266の根本的な記号を意味しているのです。トングは創造の途中段階での存在の要素や具体的には器官などを描

写します。トニイはさらに具象化された絵です。絵というより、具体的な写真のようなものと考えたほうがいいかもしれません。だからトングの図とは異なります。トングである記号は脳の中で動き回ります。それは言葉と同じです。記号とそれに続く図であるブンモン、ヤラ、トングはそれらが表現する存在のまたは物の生成を明らかにしています。絵であるトニイはそれを実現します。その結果、反対に絵であるトニイは存在を死に導いてゆくこととなります。だから人間の描くトングは来るべきもの、人間が描くトニイは終わりを示すものと言われています。これをよし悪しで表現することは避けたいです。これらをもう一度整理すると、「アンマの核には記号があった。アンマは記号を整理し、取りまとめて世界を創った。記号はひとつひとつの存在の中に赴き、絵に変化し、終焉に向かう門出を描いた。それは流転の始まりを示している。つまり、絵を描くことは存在を開始させ、消滅への第1歩を踏み出させることになる」ということなのです。ドゴン族の中ではこれらの表象が祭祀でも区別して用いられます。ブンモンは秘儀的に扱われ、ヤラ、トング、トニイは人びとの生活の中に入り込んで描かれているのです)

ここまで話すと、流石にオゴンも疲れたと見えて、大きく深呼吸をした。賢は必死にオゴンの話を追った。3人の女性は途中で頭が混乱してきた。斉藤はいきなり質問を受けることは避けて、暫くオゴンの様子を伺っていた。やがて、オゴンは立ち上がると、奥に行き1枚の大きな紙を持って来て、全員の座っている真ん中に広げた。斉藤が言った。

「以前は、このような紙はありませんでした。ですから、今話された内容は、話し手が地面に、この紙に描かれている図を描きながら説明してくれたものです。もう10年以上前のことですが、僕も何度も何度も部落に通い、同じ話を繰り返し聞かせてもらいました。今日オゴンがお話くださったことは、オゴンが我々の分かりやすいように翻訳して話してくださった内容です」

オゴンが図を示して言った。斉藤が同時通訳で説明した。

「*****」(これは家の図像です。左がヤラ、真ん中がトング、右がトニイです。これだけでは具体性が見えないかもしれませんが、これ

で十分なのです。これには物理次元の象徴と霊的次元の象徴が取り混ぜられているのです。普通の人の概念では一寸分かりにくいかもしれませんがね)

皆、図像に見入っていた。亜希子が遠慮がちに言った。

「あの一、この創造のプロセスに、愛の概念は入っていなかったのでしょうか？」

斉藤は少しびっくりしたような顔をしたが、そのままオゴンに向かって質問した。オゴンが応え、斉藤が通訳した。

「****」(アンマが世界を創造したとき、生命の半分で創造し、残りの半分の生命は自分の元に置いたといわれています。この世界が存在しているのはアンマの愛というより慈悲だと思いませんか？もし、アンマがこの世界を抹消しようと思えば、片方の生命を消せばいいんです。言葉としての愛というのは表現されないけど、わたしは創造そのものと、それを維持させることが愛だと捉えています。アンマが一番初めに創造したものは穀物であるフォニオの種子なのです。アンマはその卵の中になんか状の運動として存在していて、その卵は4つの部分に分かれていました。その4つの部分は地水火風の4元素で、14の次元を包含していました。アンマがその殻を破り、外に出るとつむじ風が起きました。もっとも、このつむじ風もアンマ自身だったのだけど、フォニオがその中心に目に見えないほど小さい形で作られたといわれています。それが世界の創造の始まりだったのです。この近辺の者は、フォニオによって生かされています。アンマの命を、人間を生かす糧に入れたのですよ。それこそ私達が存在することを許す、愛そのものじゃありませんか。その創造の意思はフォニオの種子の中に自分自身の思念として入れたのです。それは螺旋上に巡回してあらゆる原子と分子を放射し、作り出していったというのです。まさに創造主の愛だと思いませんか？」

梓が言った。

「それは、日本の天孫降臨と似ていますね。ねえ、リーダー」

「うん、僕も今そう思った。世界中どこでも同じかもしれない。瓊瓊にに

杵^ぎ 尊^{のみこと}は稲穂を一本持って天下ったといわれているから、穀物フォニオの概念に良く似ているね。人間を生かすことの象徴だね」

巫希子は両目を瞑った。存在しているものを維持することが愛であり、慈悲であるというオゴンの話を嘔み締めていた。オゴンは5人を連れて、隣の家案内した。近所の子供達が集まって来ていた。隣の家を見学した後で、現在のドゴン族の生活に附いて説明してくれるとのことだった。オゴンは各部屋を見せてくれた。部屋には余分なものが何一つ無い。杵は一生懸命メモを取った。浮かない顔をしているが、それを気取られないように振舞っている様子が賢にはよく分かった。賢は杵に近づき、額に手を当ててみた。熱は無いようだった。

「杵、気分は大丈夫か？」

「はい、体に異常はありませんが、マラリアの感染が心配で……」

「心配かもしれないけど、いくら心配しても結果は変わらない。辛いかもしれないけど、今はマラリアのことは忘れていたほうがいいよ」

「はい、リーダー。分かっているのですが、どうしても……」

賢はオゴンに質問をした。斉藤が通訳した。

「ドゴン族の意識の中では、この神話のような宇宙創生の話はどのように受け取られているのでしょうか？実際に人びとの生活に影響しているのでしょうか？」

オゴンは威厳を保つような体で応えた。

「*****」（我々は、宇宙創生から現在に至るまでの語り継がれてきた話は、総て事実と受け止めています。遠い過去にシリウス星から宇宙船でやってきたノンモはイルカのような姿をしていて、この地に着くと池に水を張りその中に飛び込んだのです。それからドゴンの人たちに宇宙の循環から人間の細胞に至るまであらゆる知識を与えてくれました。我々はそのノンモから受けた知識に基づいて過去からずっと自分達を取り巻いているあらゆる物、事、存在、現象を認識し、それがどういうものか分類してきました。そして、それらを一つのものに組み上げようと試みてきました。ノンモの教えによればもともとの始原は一つですから。あらゆるものを観察し、詳しく調べました。そして、人類、植物、

動物、地質、天文、解剖学や生理学などの学問的な分類と、社会、宗教、政治、技術、芸術、経済などの社会的事項に関する分類について、アンマの意思に基づいて説明してみました。我々には、何千という記号や象形文字があり、天文学、暦、そしてその計算体系、解剖学的、生理学的な知見、遺伝学、病気に対する施薬方法について知識があります。そして、これは人間や哺乳類、星辰といった高度なものから、虫や落ち葉、さらにはごみの類など、まるで無視されるようなものまで、同列に扱っています。我々は人間がこの宇宙の中で、特別の存在であることは疑いませんが、それは人間には認識力があるからだと考えるのです。それ以外の事項はすべて、被造物であるという点で、人間も虫も同列で考えています。だから、我々はこの世界を総合的な単一存在として認識していて、秩序的なものも、無秩序なものも、あらゆる存在がその中に含まれていると考えています。そして、その存在は多様性を与えられ、与えられた範囲で自由に存在することが許されていると考えています。それは創造神アンマによって思惟され、顕現され、秩序づけられていると。我々の社会的組織の根底にある原理は自分達が作り出す現象と自然のあらゆる現象、他の社会から出てくる現象 — それらを総て包含する分類体系で構成されています。その分類体系では儀礼、遊戯、労働、織物、陶器、昆虫、植物、動物などがさらに細かく分類できて、それらが相互に関連しあった各範疇に分けられて一つのシステムを構成しています。家族制度の中にも同じ原理が組み込まれています。あらゆるもの、あらゆることを、丁度陰・陽のように、どんな複雑なものも、一つの対立構造を持ったものとして捉えています。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、それがドゴンの物の考え方で、儀式や行事、生活様式にまでしっかりと組み込まれています)

賢はオゴンの話に聞き入った。賢は、一般の人たちが思っているアフリカ概念は、事実と大きく異なるものだと認識した。一般の人たちはそこで生活しているアフリカの民族が祭祀や祈祷など因習的な行事を行う得体の知れない、未開民族のような感覚で見ているが、宇宙衛星を飛ばし、株や先物取引をする現代人に比べて、はるかに意識的に生きるこ

とのできる社会がそこにあり、ドゴンの人たちはその世界で生きていることを知った。確かに現代のような何でもありの自由奔放さはないが、現代社会の中で生きる者たちの自由は法律や規則という枠の中での無秩序であり、それに比べ、ドゴンの秩序だった社会とその中で意識的な自由な行動は、オゴンのような指導者が導く、宇宙の創生を理解した上での行動であるとの考えに至った。オゴンに促されて部屋から外に出ると、子供達が5人の周りを取り囲んだ。斉藤のことを知っている子供が2、3人いるようだった。斉藤も手を振ったりして、笑顔を振りまいていた。家の前の大きな木の下に木製のベンチがいくつか置いてあった。オゴンは5人を木の縁台に腰掛けるように促してから、自分もその前の縁台に座った。

「****」(ここにはまだイスラム教が進出してきていないんです)と前置きしてから、オゴンが話し始めた。この生活に附いて斉藤はよく知っていると見えて、同時通訳で説明をした。

「****」(ドゴンの社会は一見複雑なようですが、しっかりとした制度に基づいて運営されていて、リネジという集落とギンナという大家族で構成されています。男はこのギンナを手に入れると複数の妻を持つことが許されています。初めの妻は親の決めた許婚で、夫は妻となるギンナに奉仕の仕事をする義務を持ちます。2番目以降の妻は離婚したり、夫と死別したりした女性で、その場合は妻のギンナに対する奉仕の義務はありません。女性は亭主が他界すると、普通は亭主の兄弟と結婚します。これは種族を維持するための知恵から来ているのです。ここでは男と女の役割がはっきりと別れています。あくまで男は天の役目を担い労働を、女は子育てと地の仕事を担当することになっています。最近ではこの区分けも厳格に守られなくなってきました)

それからオゴンはドゴンの生活について説明した。主に男と女の仕事についてだった。説明が終わると、オゴンは5人を連れて村の中を一巡してくれた。岩壁に彫りこまれた住居は、その安全性とともに、居住時の困難さが伴っていることは確かだった。しかし、ドゴン族は長い間、ここでの生活を維持してきたとのことだった。この日はオゴンの説明を受

けただけでそのままホテルに行くことにした。斉藤の話では、ここのホテルはまだ出来たばかりで、それほど経ってないとの事だった。宿に着くと梓がますます元気を無くしていた。賢はたびたび梓の熱を診たが、特に変化している様子はない。しかし、梓は気持ちが悪いと言い始めた。皆心配になった。斉藤は蚊に指されても直ぐに症状が出ることはないと言う。その言葉を聴いても、梓の元気は回復しなかった。食事もほとんど手を付けない。賢たちは梓の体力も心配になってきた。翌日は少し遅めのスタートの予定だった。しかし梓が熱っぽいと訴えた。食事は全く喉を通らないようだった。体に特に痛みを覚えるところはないようだったが、賢が梓の額に手を当てて見ると、確かに熱っぽい感じがする。梓はホテルに留まると言った。賢は梓の感染の有無を確認することが先決だと思った。この日にドゴンの岩絵などを視察して、明日モプティに戻る予定だったが、賢は1日の延泊を決めた。斉藤が梓をマラリアの感染の有無を判定できるドゴン族の長老の元に連れてゆくことになった。賢は自分だけが付き添うと言ったが、亜希子も愛子も、「ふたりだけで外に出ることは控えたいし、ホテルに居てもすることが無い」と言った。結局全員、梓に付き添うことになった。梓は傍から見ても可愛そうなほど、しょげ返っている。

「リーダー、済みません。わたくしのために予定を変更することになってしまって」

「心配要らないよ。予定なんてどうにでもなるじゃないか。それより、君の体のほうがよほど大切だよ。感染しているかどうかははっきりさせなくては、これからの行程もおぼつかなくなってしまうよ」

斉藤が言った。

「先ずは、感染しているかどうか、白黒をはっきりさせましょう。それから今後の計画を決めたほうがいいと思います。でも潜伏期間がありますから、普通は最低でも1週間以上経ってからじゃないと検出できませんがね」

賢もその通りだと思った。梓が言った。

「わたし、自分を刺した蚊を潰しました。その蚊をビニール袋に入れて

持っています。それでも感染の有無が分かりませんか？」

斉藤が言った。

「それなら、話は別です。直ぐに長老の所に行って調べてもらいましょう。それに貴女の熱の原因が何なのかははっきりさせたほうがいいと思います。長老はいろいろな薬草を持っていますから、熱などは直ぐに直してくれませよ」

長老の元にはマラリアの検査が出来る試験装置があった。検査の結果が出るまでに1時間ほど待つだけで済んだ。蚊はマラリアの病原菌を持っていなかった。斉藤は梓の熱はどうやら風邪が原因のようだと、長老の言葉を通訳して言った。梓は蚊に刺されてからというもの、屋内外を問わず、長袖シャツを着、長めのパンツを穿いていて、暑い外気の中で汗をかき、風に当たって体を冷やしてしまうことを繰り返したので、体が温度変化に対応できなかったのだろうとのことだった。それと、もう一つの大きな原因は不安と恐怖心にあった。梓はマラリアに感染することに強い恐怖心を抱いていたので、感染の可能性を知ったときその恐ろしさに体が動かなくなってしまった。そして、そのことで体が不活性になってしまっていた。それが発熱を引き起こした可能性が大きかった。蚊が病原菌を保有していないことが分かると、梓は途端に元気になった。

「リーダー、お腹が空いたわ」

賢に甘えるように訴えた。正午に近かったので、賢は全員で近くのレストランに行くことにした。食事が済んだら各地を見学してから別の村に移動して泊まることにした。一旦ホテルに戻り、直ぐにチェックアウトを行った。斉藤が言った。

「最近、ここを訪れる外国人の観光客が増えたので、いいレストランがちらほら出来てきました。僕が案内します。どんな料理が好きですか？」

いつも遠慮がちにしていた梓が訴えるように言った。

「ピザが食べたいです。チーズが一杯載ったピザが食べたいわ」

賢は梓に食欲が戻ってきたのがうれしかった。亜希子と愛子もほっとしたようだった。愛子は空腹だったので、梓の言葉に一層うきうきしてき

た。そろそろ日本で食べていた食事が恋しくなってきた。

「運がいいですね。ピザを出してくれるレストランなら最近出来ましたよ。レストランと言えるかどうか難しいですがね。ピザのような味のする食事ということで……」

ピザを食べさせてくれるレストランはホテルの近くにあった。賢と斉藤はビールを頼んだ。3人の女性はコーラを注文した。愛子を除いて他の4人は、マルゲリータピザを頼んだ。愛子はソーセージの乗ったピザを頼んだ。

「梓さん、それにしても、自分を刺した蚊を持っていたとは驚きました。凄い執念ですね」

斉藤が言った。

「わたくしは怖かったんです。感染者の内の1パーセント程度であるとはいえ毎年100万人以上の方がマラリアで死んでいるんですから、もしハマダラ蚊に刺されたら駄目かもしれないと思っていたでしょう。そこにもってきて、先ず自分が刺されてしまったんですから、もう気が動転して、恐怖心で何を聞いても気もそぞろでした。うまく蚊を潰すことができたので、蚊の死骸さえあれば、感染の有無を知ることができると思い、直ぐに保存することにしたのです」

賢も感心した。

「流石に梓だ。そんなことを考えるんだから。それに、自分を刺した蚊を潰すなんて、執念としか言いようがないな」

「リーダー、そんなにからかわないでください。わたしは真剣なんですから」

全員笑った。シェフと思しき男性がビールとコーラを持って来た。白人だった。一口飲むと、賢はあまりの冷たさに歯がしびれるような感覚がした。

「すごく冷たいですね。どうしてこんなに冷やすんでしょうかね」

斉藤が言った。

「このあたりのレストランでは、冷やせるだけ冷やします。この冷たさが、暑さを吹き飛ばしてくれますからね」

コーラを口にした愛子が言った。

「コーラもすっごく冷えているわ」

チーズがたっぷり盛られた薄手のピザを運んで来たのはイタリア人のシェフだった。シェフが自らそう名乗った。ドゴンに興味を持ってやって来てここに居付いたとのことだった。斉藤と愛子は久しぶりのピザに感嘆の声を上げた。その日の午後はいろいろな村を見て歩くことになった。梓はまるで子供のようにしゃいでいた。そのはしゃぎぶりを見て、賢は愛子と梓をまるで姉妹のように感じた。ピザレストランを出てから再び車に戻り、暫く川沿いの道を走った。土塀の珍しい家並み、川岸に沿ったあちこちの畑で婦人達が水桶や壺を手にして水を撒いている。日本ではもう見なくなった牧歌的な風景だ。一人の老人が、道路端で地面に升目の図を描き、コテを使って地面を均し、南京豆を撒いている。翌朝、柀の中に残っている青い狐といわれるジャッカルの足跡の付き方で占いをするのだと斉藤が説明した。一行は車を停めてしばし見物した。愛子が斉藤に向かって質問した。

「あれは、どうやって占うのかしら？」

「僕もよく分からないんですが、あの占いをするには秘儀の伝授を受けなければならないようです。まだ若くて経験の無い占い師は石で図を描いたり、地面を均したりしますが、秘儀に通じた高齢者はアカシヤのコテを使うようです。あの老人もアカシヤのコテを使っていましたね。アンマによる世界の創造という次元と陥落したオゴンに関する次元とが描かれていて、秘儀に通じたものでないと、ジャッカルの足跡のつき方を判別できないようです」

「ふうーん、なんか難しそうですね」

愛子はそれ以上の質問はしなかった。2時頃ボンゴ村に到着した。5人はそこで車を降り、斉藤に附いて岩山を登って行った。眼下には足のすくむような崖が切り立ち、その向こうに広々と平原が望める。賢は意識が拡大するような感覚を覚えた。暫く歩くとやがてバナニ村に到着した。ドゴンの住居を見学してから、断崖絶壁のテレム人の住居跡も見学した。

「よく人が住むことが出来るものだわね」

女性達は感心していた。休息を兼ねて暫くのんびりしてから、また車で移動し、クンドゥ村に向かった。途中で再び車を降り30分ほど岩山を登って行くと、崖の下からは死角となる位置にクンドゥ・ドゴモの集落があった。賢はまるでアリゾナのアナサジの住居跡を見ているような印象を受けた。子ども達が何かをねだって執拗に寄って来る。5人は、子供達に何かあげたいと思ったが、何も持っていなかった。見学を終えると賢が先頭を歩き、斉藤が最後尾に附いて下山した。車に戻り、宿泊予定を変更したクンドゥ村のキャンプマンという名の宿舎に向かった。テントに毛の生えたような宿だった。そこにははじめから蚊帳が用意されていた。特に夕方は神経を使わなくてはならない。梓は再び緊張した。持って来た蚊除けのスプレーを嫌というほど体中に吹き付けた。夜は涼しくなるとは謂え、しばし休憩のつもりで入っていたテントの中が、あまりにも蒸し暑くて皆気分が悪くなってきた。日が落ちてから5人はテントを出て近くの食堂に向かった。夕食はオニオンスープとパンと豆の食事だった。味は淡泊だったが、疲れていたため全員美味しく味わうことができた。賢と亜希子はふたりでテントの外に出てみた。満天の星空だ。この世界にふたりだけしか存在しないような錯覚に陥る。アフリカの夜は本当に静かだった。亜希子がポツリと言った。

「祐子お姉さま、今頃どうしていらっしゃるかしら」

「・・・・・・・・」

フェニックス

4人はアリゾナ州のフェニックス・スカイ・ハーバー国際空港に降り立った。バマコから2日かかった。長い道のりだった。飛行機が着陸したとき、愛子は興奮気味に「やったね！」

と言った。

「やっとなついたわ。ああ、よかった」

梓もほっとしたように言った。亜希子は3人の視線に会うと、少し微笑んだ。賢の胸は高鳴った。両親に逢うのは何年ぶりだろう。飛行機の登場口を出ると、カーッとした熱気が4人を襲った。しかし、直ぐに体が冷たい空気に包まれた。空港ターミナルの中は冷房が効いていた。アメリカの入国審査はかなり執拗だった。指紋をチェックされ、虹彩をチェックされ、靴を脱がされ、ベルトも外され、持ち物全てを詳細にチェックされた。その上、簡易PCR検査を受け、コロナウイルス感染の有無をチェックされた。時間はかかったが、全員無事アメリカに入国できた。税関を抜けてEXITから出るとそこに賢の両親が待っていた。父親は賢よりやや小柄だが、体格のよいメガネを掛けた男性だった。黒々とした髪がふさふさとしている。母は白人ですっと背が高く、ブラウンの髪をしている。やや細身だが、まだあどけなさが残った顔をしている。母が手を振った。「Hi, Ken. How are you doing?」（ハイ、賢。元気にしてる？）

「Hi, Mom. Hi, Dad. I' m fine. How about you?」（ハイ、ママ、パパ。僕は元気だよ。おふたりは？）

賢は小走りで母のところに近づくと、ハグした。

「We are OK, honey. But too busy now.」（わたくし達は元気よ。だけど、今はとても忙しいわ）

「You are always busy, aren' t you.」（何時も忙しいんだね）

賢は日本語で仲間を紹介した。

「僕の友達、藤代亜希子さん、同僚の田辺梓さん、そして、手紙にも書いたけど、養女の愛子です」

3人の女性が頭を下げるのを待って、賢は両親を紹介した。

「皆さん、これが僕の父、病院の先生。こちらが母です。看護婦です」
5人はそれぞれ握手を交わした。父が車を取りに行くと言って駐車場に向かった。5人は車の乗降場所で待つことにした。母が女性達を気遣って、たどたどしい日本語で話し始めた。

「アフリカから来たから、大変だね。疲れたね」

「ママ、大変だったよ。特に女性にはきつい行程だったな」

賢は確認するように3人の方を向いて、頷きながら言った。

「久しぶりなから、パーティあるよ。賢の好きなクラムチャウダーある」

賢は嬉しかった。英語で母に話し掛けた。

「You speak Japanese very well. When did you learn it?」（日本語がとてもうまいね。何時習ったの?）

「毎日、ダディと話すことしてる。可笑しいか、賢?」

「We can understand what you mean. Ok, we shall speak Japanese while we are here.」（言わんとすること分かるよ。よし、僕らがここに居る間、日本語で話そう）

「いいよ。ダディも喜ぶ。ダディ病院で英語話す。日本語忘れる」
少しして父が車を乗降場所に停めた。日本車のサクセスだ。父はトランクを開けると、賢とふたりで全員のスーツケースを積み込んだ。4つのスーツケースを入れてもトランクにはまだ十分な余裕がある。

「車は5人乗りだから、賢はトランクに入るか?」

父はまだ、賢を子ども扱いしている。冗談を言っているつもりのようだ。賢はにっこり笑って言った。

「トランクは狭いから、屋根にへばりついているよ」

父と賢は顔を見合わせて笑った。父は後部座席のドアを開けると、女性4人に乗るように言った。

「少しきついけど、暫く辛抱してね。賢は前に乗れ」

「あなた、静かに走るね」

「静かに走ってね、だよ」

「そうそう、静かに走って、ね」

「OK, good. それでいい。大丈夫だ。ゆっくり走るよ」

「ゆっくり走って、早く着いて、ね」

「Ok, naturally.」（うん、そうだ）

父は車をスタートさせた。

「英語だめ、日本語話すよ」

「英語はだめ、日本語を話そうね、だよ」

「OK、英語はだめ、ね。日本語を話そう、ね」

「Good. いいぞ、その調子だ」

父と母の冗談交じりの会話を聞いているうちに、車は空港のエリアから出て砂漠の街に入った。賢の胸に懐かしさがこみ上げて来た。一旦143号線ホコハン高速道路を通り、レッド・マウンテン・フリーウェイに入った。次第に記憶が蘇ってくる。

「ダディ、今日は何曜日？」

「日曜日だよ。アフリカに行くとも曜日も分からなくなっちゃうのか？」
父は笑いながら応えた。この道は202号線だ。それから別のフリーウェイ101号線に移るはずだ。ピマ・フリーウェイを北に向かって走ってゆく。それまで黙っていた愛子が声を出した。

「砂漠の中のような、それでも緑がきれいな街、賢パパ、ここはどこ？」

「あの緑はみんな芝生だよ。フーバーダムから水を引いているんだ。暑い砂漠に出来た街だから、絶えず水をやらないとみんな枯れちゃうんだ。ここはフェニックスの隣、テンピって謂うところだよ。だけど直ぐにスコッツデールという街に入る」

賢がそう言うと、父が

「もう、スコッツデールだよ、もう少ししたらフリーウェイを降りる」と言った。少しして母が愛子に言った。

「愛子さん、あと少しでマイハウスに着くよ。皆、疲れているよ。シャワーを浴びるから、パーティをするよ。 Did I speak correct Japanese? (わたし、日本語を正しく話したかしら?)」フリーウェイを降りる側道に出ながら父が言った。

「You'd better to speak like this (こう言ったほうがいいよ) “みなさん、疲れているでしょう。シャワーを浴びてから、パーティをしましょう”」

「Oh, yes, I know it. (ああ、そう、知っているわ) “みなさん、シャワーを浴びてから、パーティをしましょう、ね」

3人の女性が「はい」と声を合わせて応えた。賢と父は声を出して笑った。父が言った。

「お前と、よく一緒に居た友達、何と言ったかな？彼は来ないのか？」

「数馬のこと？あいつは結婚したんだ。これからはそう一緒には行動で

きないよ」

「そうか、彼も結婚したのか、賢、お前はどうかんだ？」

「ダディ、その話は、また後にしようよ」

「そうだな、おっと、もうじきマイハウスだ」

100メートルほど走って右折し、そこから小道に入ると父はココナツの木を左右に2本ずつ植えてある大きな2階建ての家に向けて右にハンドルを切った。車庫のシャッターが自動的に上がる。車庫の手前で父は車を停めた。

「ここで降りたほうがいいね。荷物も降ろさなければならないし」

「ダディ、引っ越したの？」

「うん、1年前に引っ越した。今度はプールもあるぞ」

窓が沢山ある大きな家だった。車から降りると、また熱風に体が包まれた。父と賢が2人がかりでスーツケースをトランクから出した。女性達は少し緊張していた。母はスーツケースを引いて、もじもじしている女性達を促し、入り口のドアまで案内した。父は車を車庫に入れる為にまた車に戻った。車が車庫に入るとシャッターが自動的に降りた。父は車庫の中から家に入るようだった。賢は辺りを見廻していたが、皆が先に行ってしまったので、スーツケースを引きながら急いで母の後を追った。

「みなさん、どうぞ、さあ入ってください」

母はそわそわしている。ドアを開けて中に入るとそこは吹き抜けの大広間になっていた。鉢植えの観葉植物がいくつも飾られていて、左手奥にグランドピアノが置いてあった。右側に広い階段があり、2階のテラスに繋がっている。左手にあるピアノの横手奥にカウンターバーがあり、棚にウイスキーやブランディーが並んでいた。ピアノの手前の広い空間には12、3人ほど掛けられるソファがL字型に置かれている。そのスケールに愛子と梓は呆然としていた。亜希子は特に驚いた様子は見せなかったが、その場の雰囲気には日本の自分には無い独特の暖かさを感じていた。父が階段の脇にあるドアを開けて入って来た。

「さあ、皆さん、ソファに腰掛けて。ママ、コーヒーを入れてくださ

い」

「はい、パパ」

「まあ、休憩してから部屋に案内しましょう、スーツケースはそこに置いて、さあ座りましょう」

母はカウンターバーに行き、コーヒーサイフォンのスイッチを入れた。直ぐにコーヒーの香りが立ち込めてきた。父は皆をソファに座るよう促した。賢も父と一緒に3人の女性を促した。3人は遠慮がちに隅のほうに並んで座った。賢は父が腰掛けた一番奥のソファ、父の隣に座った。母がコーヒーを運んできた。

「Everybody, (皆)、コーヒー飲みましょう、これはキリマンジャロですよ」

父が言った。

「皆、本当に疲れたでしょう。今日は、特にみんなの予定が無ければ、この後、部屋に案内します。ゲストルームが3部屋あります。一人一部屋です。バス・トイレも部屋にあります。もちろん空調もありますから心配要りませんよ。それから、外にはプールがありますから、水浴びしたら汗が引くかもしれませんね。水着はママのを使えばいいですよ。いいね、ママ」

「My pleasure. OKですよ。セパレートもワンピースもOK。大丈夫だよ」

愛子がちょっと小さい声で言った。

「わたし、泳いでみたい」

賢が笑いながら言った。

「そうだ、後で、愛子は水着になって、バレエを踊って見せたらどうだ？その後で、プールに入ったら？」

「・・・でも、恥ずかしいから・・・」

「いいじゃないか。ダディ、ママ、愛子はバレエを習っているんだよ」

「それ、素敵だね。わたしは見せてほしいです」

ママが、興味深そうに言った。父も「ぜひ見たい」と言った。愛子は顔を赤らめながら頷いた。10分ほど休憩すると、4人は父の案内でゲス

トルームに向かった。ゲストルームは2階にあった。階段の脇に荷物用のエレベータが設置してあった。父が先に2階に上がった。賢が下からスーツケースを一つずつ送った。父が2階でそれを受け取る。インターホンで会話しているふたりは、同居している家族のような雰囲気だった。3人の女性は賢の横で自分のスーツケースが上がってゆくのを見ていた。スーツケースを全部上げてしまうと、4人は横の階段から2階に上がった。階段は途中に踊り場があり、そこから吹き抜けの居間を一望することができた。3つのゲストルームは2部屋がツインベッドルーム、1部屋がシングルベッドルームだった。愛子がシングルベッドルームに、亜希子と梓がツインの部屋に案内された。どの部屋も30㎡ほどの広さだった。あまり広くはないがシャワーとバス、トイレ、それに洗面台も附いていた。3人の女性は喜んだ。3人にシャワーを浴びるように言うと、父は賢を連れて賢の部屋に向かった。50㎡ほどの部屋だった。以前住んでいたときのままの状態が再現されていて、壁には大きな書棚が取り付けられていた。以前の書籍がそのまま入れられている。

「ダディ、ありがとう。感激したよ。昔のままじゃない」

「うん、賢がいつ帰って来てもいいようにしてある。わたし達には、お前しかいないからな」

母が開け放してあったドアから姿を現した。

「Ken, do you like it?」（賢、気に入った？）

「Thanks Mom. I'm surprised you could have kept my things for a long time.」（ありがとうママ。僕のを長い間、取っておいてくれたんで、びっくりしたよ。）

「Of course. You are only our lovely son, honey.」（勿論よ。たった一人のかわいい息子ですもの）

ベッドメイキングもしてあり、直ぐに休めるようになっていた。

「Your clothes are in this chest, Ken. Anyway, take shower first and come down to the dining room with them.」（衣類はこの小ダンスにあるわ。兎に角、先ずシャワーを浴びて、みんなと一緒に食堂に降りて来てね）
両親はそう言うと、ふたり揃っていそいそと賢の部屋を出て行った。賢

は自分がこの上なく愛されていることに胸が熱くなるのを覚えた。シャワーを浴びると賢は3人の女性を連れてダイニングルームに下りた。

「賢パパ、わたし、どうすればいいかな？」

「いつものままの愛子でいいよ」

「だけど、わたしは、賢パパの娘なのよ。何かしないといけないんじゃないかな？」

「まだ、何もしなくてもいいよ」

「そうだね。まだ、わたしは、誰でもないものね」

「うん、これから、誰かになってゆくんだよ」

「分かったわ。わたしね、この服の下に、さっきお母さんから貸してもらった、水着を着ているのよ」

愛子はオレンジ色のワンピースを着ていたが、よく見るとうっすらと水着の影が浮き出ている。

「そうか、バレエを踊るんだな。それは楽しいね」

亜希子は白のワンピースを着て、左の胸にバマコの空港で買った蘭のコサージュを着けている。梓はベージュの上着と、キャメルのスカートを身に着けていて、ビジネスウーマンの印象がする。4人がダイニングルームに入ると、テーブルには既にテーブルウェアが用意されていて、父がワイングラスを並べているところだった。

「おお、皆来たか。さあ、自由に座って」

10人分の椅子が置かれていた。端から2席空けてその横に賢は座った。3人の女性は、どこに座ったらいいか迷っている。

「何処でもいいんだけど、そうは言っても迷うよね。亜希子さんはわたしの隣、その横に梓さん、そして、愛子ちゃんは賢の横に座るといいかな？」

父の言葉で3人は席に着いた。愛子がもじもじしながら言った。

「わたしは、お父さんのことを何と呼んだらいいですか？」

「はっはっはっはっは、そうだな、・・・うん、ビッグパパがいいかな、なあ、賢」

「うん、いいかもしれないね、ダディ、グランパじゃ可哀想だしね」

「こら、賢、・・・さあ、ママが来たら乾杯しよう、ママ、ママー」
父は後ろを向いて母を呼んだ。どうやら後ろ側がキッチンになっているらしい。ダイニングルームからは見えない。ママが大きな、チーズとサラミ、コーンチップを盛った皿を2つ持って来た。

「ハイ、パパ、皆さん、お待ちさま」

「お待ちどうさまだよ。さあ、ママ、席に着いて、一度乾杯しよう」
母が持って来た皿を賢の前と、梓の前に置いてから、

「わたくし、ここ、OKね」

と言いながら賢の横の席に着いた。父が愛子以外のグラスに白ワインを注ぎ、愛子のグラスにコーラを注いだ。

「Here's to them, to their happiness! Toast!」(彼らの未来に、彼らの幸福に、乾杯)

「Toast!」(乾杯!)

全員が唱和した。皆それぞれに飲み物で口を濡らすと、微笑を浮かべながら静かにグラスを置いた。梓が言った。

「あの一、お父様、一つお聞きしてもいいですか?」

「はい、田辺さん、どうぞ、ご遠慮なく」

「はい、えーと、どうしてHere's to you. To your happiness.とおっしゃらなかったのですか?」

「はっはっはっは、ああ、そうだね、普通はyouだよ。ごめん、ごめん。だけど、もうわたくし達は、十分すぎるほど幸せだろう、だから他の人たちに幸せになって欲しいじゃないか、だから、themと言ったんだよ」

梓は感心したように頷いた。賢は亜希子の目にうっすらと涙が浮かんだのを見逃さなかった。ママが言った。

「わたしは、パパのそれが、大好き、だから、結婚したよ・・・藤代さんと田辺さん、賢の友達?」

賢は「Yes」と言って、亜希子と梓の顔を見た。梓が言った。

「わたくしは、賢さんと一緒に仕事をしている仲間です。この旅はBusiness trip (出張旅行) です」

「そうなのね、大変です。アフリカとアメリカ、暑いんです。病気がないですか?」

父が補足した。

「アフリカもこのアリゾナも暑いところだから、本当に大変だね。ママは、体が大丈夫か聞きたいんだよ」

梓は微笑んで応えた。

「ありがとうございます。アフリカで蚊に刺されて、パニックになりました。でも、大丈夫だったようです。心配だから日本に戻ったら、また、検査をし直してみます。それ以外は大丈夫です」

「おお、そう、大変だね。藤代さんは、OKですか」

母は言葉を捜しながら、一生懸命話し掛けている。

「はい、お母様、わたくしは大丈夫です」

「よかった。OKなの、ね。あなたは、賢の友達ですか?」

「はい、でも、ガールフレンドです」

父が間に入って言った。

「おお、そうか、君はガールフレンドか。君達は結婚するつもりか?」
亜希子の顔が、アルコールの影響かどうかわからないほど、ほんのり赤くなった。愛子はキョトンとしている。愛子は“ガールフレンド”が“恋人”の意味だということを知らなかった。女友達と紹介されて、直ぐに結婚の話をするのが、理解できなかった。賢が言った。

「ダディ、亜希子は永遠のGirl Friendなんだ。だけど、僕はまだ、結婚はしません。」

一瞬硬くなった梓の顔に、すぐに微笑が戻った。母が、微笑みながら席を立った。

「料理の準備、するね。ちょっと、待ってね」

愛子が直ぐに立った。

「ビッグママ、わたし、手伝います。」

その声を聞いて、父が笑った。賢も笑った。

「わっはっはっはっは、ビッグママはいいね。愛子ちゃん、だけど、ママが、ちょっと可哀想だね。ただのママと呼んであげて」

父がそう言うと、愛子はすまなそうに言った。

「ごめんなさい、わたし、何と呼んでいいかわからなくて」

「愛子さん、いいのよ、わたしは、ビッグママ、好きだよ。愛子さん、手伝ってくれる？こちらに来てね」

ママが言った。亜希子と梓も席を立って、母の後に附いて行った。父と賢だけになった。

「賢、おまえ、いずれ亜希子さんと結婚するのか？」

「いいえ、ダディ、僕はずっと結婚するつもりはありません」

「だけど、この社会じゃ、それが普通じゃないのか？」

「はい、ダディ、それは分かっていますが、まだ、自分が何者か分かっていません。もう少し、自分のことが分かってからにしたいのです」

「自分のことが分かったら、亜希子さんと結婚するのか？」

「・・・僕には、もう一人心から愛している人がいます。その人は今、アフリカに居ます」

「そうだったのか。それで、その人はアフリカで何をしているんだ？」

「はい、人びとを助けています。僕は、その人と、一生共に生きようと心に決めています」

「だけど、亜希子さんもガールフレンドなんだろう？」

「はい、矛盾しているようですが、真実です。ふたりとも愛しています。ぼくは、普通の人のように、一人の女性だけを愛し続けて、他の人とは普通に付き合うということができないんです。直ぐに愛してしまうんです。あの田辺梓のことも、もう愛しています」

「おお、それは困ったもんだ。それじゃあ、皆を不幸にしてしまうな。それじゃあ、結婚はできないな」

「はい、だから、自分自身のこと分かるまでは、結婚はしないつもりです。ただ、アフリカに居る女性とは生死を共にしたいと思っています」

「その女性は何という人だ？」

「はい、崎野祐子といいます。今は藤代家の養女になって亜希子の姉になっていますが」

「そうか、なんか複雑だな。だけど、お前の気持ちはどちらの女性に向

いているんだ？」

「はい、ダディ、僕にはどちらのほうが好きとは言えないのです。両方とも大切に、愛しているんです。この気持ちはどうすることもできません。ダディ、僕は異常なんでしょうか？」

「異常なことはないと思うけど、普通の男性とは違うようだな。あらゆる女性に性欲を覚えるのか？」

「いいえ、ダディ、そういう動機は無いんですが、近くに居ると好きになってしまうんです。女性だと成り行きでそういうことになることもあります。男性に対しても同じような感情が沸き上がってくるんです。何と言ったらいいか、相手と居ると、自分が無くなって、相手になってしまったようになるんです。それも、意図しないうちにそうになってしまうんです」

「そうか、以前スワミが、お前はある目的を持って生まれてきたと言っていたが、そのことと関係あるのかな？」

「ダディ、スワミは僕がこの間インドに調査の出張をしていた時に亡くなりました」

「そうだったのか……」

父は下を向いて黙って軽く頷いたが、スワミについては一言も口にしなかった。そのとき母がスープの入ったボールを持って戻って来た。愛子がスープ皿を持って後から附いて来る。亜希子がフランスパンの入ったバスケットを、梓がバターの皿と取皿を持って来た。女性達はパンとスープの準備をしてから、再び厨房に戻って行った。賢は亜希子を観た。亜希子も賢に視線を投げ掛けた。ふたりの目と目が合った。亜希子は目を伏せて、そのまま厨房に消えた。

「そうは言っても、日本やアメリカじゃあ一夫一婦制だから……それで、結婚できないのか？」

「ダディ、違うよ。僕は結婚して、生活することに重点が置かれた人生を生きたくないんだ。子供を育て、休みには子供を遊園地に連れて行き、夜には妻とひと時を過ごす。平凡でいいとも思うけど、それが総てになりそうで、もっとしなくてはならないことが一杯あるようで」

「まだ、今の内はいいか。もう少ししたら、もう一度真剣に考えてみたほうがいいな」

「はい、ダディ、そうします」

女性達は直ぐに料理を持って来た。シュリンプカクテルとポテトサラダ、チキンのソテー、ロブスターテイル、イカのフライがテーブルの上に並べられた。スープはオニオンスープだった。

「ママ、それにみんな、大変だったね。ご馳走じゃないか」

「パパ、皆、手伝ってくれた。だから、早くできた、Good、ね」

5人にとっては久しぶりのご馳走だった。女性たちが席に着くと父がもう一度全員のグラスにワインを注いだ。食事が始まった。母は再び席を立ててスープをよそったり、サラダを取皿にとって配ったり忙しく動き廻った。

「みんな、一番好きなものと一番嫌いなものを教えてくれないか。自分が一番幸せを感じるものをね」

「ダディ、それはどういう意味？」

「いや、難しく考えないで、たとえば、わたしだったら、一番好きなものはママ、一番嫌いなものは蠍だな」

「ああ、そういうこと。これなら皆応えられるよね。じゃ、ママから言ってみて」

賢が父をフォローした。ママがサラダとスープを給仕し終わって席に戻りながら言った。

「さあ、皆さん、召し上がれ。さあ、どうぞ……わたしの、一番好きなもの、それはパパ、ねえ、パパ。一番嫌いなもの、それはGood by」賢はうーむと唸った。そしてスープのスプーンを手に持ちながら言った。

「じゃあ、僕が次に言うね、僕の一番好きなもの、それは愛、一番嫌いなもの、それは真実でないもの」

亜希子が言った。

「真実でないものって、嘘のことですか？」

「言葉による嘘じゃなくて、自分を偽ることだよ。これが一番嫌いだ・

・ ・ じゃあ、次は梓が言ってみて」

梓は食事に手を付けずに自分に順番が廻ってくるのを待っていたようだった。

「はい、わたくしの一番好きなものは朝日です。そして、一番嫌いなものは暗闇です」

父が言った。

「なるほど、光と闇だね。うん、とても美しい応えだね」

賢が亜希子を指名した。亜希子は水を少し口に含み、ナプキンで口を拭いてから言った。

「わたくしの一番好きなもの、それは、或る方です。一番嫌いなもの、それは人々の苦しみです」

賢が言った。

「或る方って、祐子のことかな？」

亜希子は首を横に振って言った。

「前にも申し上げました。祐子お姉さまは2番目に好きです」

賢はそれ以上聞かなかった。父も母も黙っていた。賢が言った。

「愛子、お前はどうか？」

「わたしは一番好きなものはありません。一番嫌いなものもありません。みんな好きです・・・賢パパ、一つ聞いてもいいですか？」

賢が言った。

「皆好き。嫌いなものが無い。皆好き・・・で、何か質問？」

「さっき賢パパが一番好きなものを愛って言ったでしょう。愛って、好きとか、嫌いとかいうものかしら。ちょっと疑問に思ったの」

父と母は微笑みながら賢を見つめた。賢が言った。

「人を愛することが好き、人に愛されることが好き、自分が愛そのものになり切りたい。愛だけを抱いて、この世界を生きたい。愛の中で死んで逝きたい。だから、愛が一番好きなんだ」

「なんか、分かったような、分からないような。でも愛が最も大事だということね」

「そうだよ。愛子の言う、嫌いなものが無い状態もそれに近いかもしれ

ないね・・・ところで、ダディ、どうしてこんな質問をしたの？」

「それは、君達がどういう人か知りたかったからだよ。わたしの思っていた通りの人たちだった。さあ、どんどん食べて・・・」

「皆さん、ドレッシング5種類あるよ。選んで、ね。ロブスターおいしいよ」

ママがみんなの食事の進み具合を見ながら言った。食事をしながら、アメリカでの視察予定に附いて賢が説明した。父と母はふんふんと相槌を打ちながら聞いていた。

「ダディ、ママ、そのナバホの人たちとコンタクトを取ることにはできるのかな？一応、日本でガイドの予約をしたけど、アメリカは現在、昔よりもずっと複雑な世界になっているでしょう。自然と共存していたアメリカ・インディアンの生き方なんてもう薄れてしまっているんじゃないかと心配でね」

「うん、それはそうだな。純粹にネイティブなインディアンの生き方を継承している人たちがどれほどいるか、確かに疑問だな。わたしの知り合いに会ってみるか？わたしの患者だった人だけど、「アメリカ・インディアンの現在の姿は自分達が呼び寄せた姿だ」って言っていた。「悲しいけれど仕方がないんだ」ってな」

亜希子が言った。

「アメリカ・インディアンの人たち、大勢殺されたんですね。わたくし本で読んだことがあります。随分残酷だったって。無抵抗な老人や子供達も皆殺されたって。まるで、ルワンダで見たジェノサイドで殺された人たちのようだったって」

「悲しいことだけど、事実だな。そのインディアンの人たちの犠牲の上に、現在のアメリカという国があるんだ。自由と平等を歌った国がね」父が少し皮肉っぽく言った。母は全員の食事が進んでいないのが気にかかった。

「みんな、あまり食べていない。食事食べてください」

母に言われて、皆それぞれに意識を食事に移した。

「人を殺すときはどんな感覚なのかしら？動物を殺すときと同じなのか

しら？つい先日、口帝疫で多くの牛や、豚が殺されたわ。12万頭も。動物を飼育していた人たちは、心の病に陥ったって、ニュースでキャスターが解説していたわ。東日本大震災の後で起きた福島原発の避難勧告の時、沢山の畜産農家の人たちが家畜を置き去りにしなくてはならなかった。そのときの畜産業の人たちの悲しみは、どれほど大きかったかしら。広島に原爆を落とした人、そのとき原爆投下のスイッチを押した人は、「日本がパールハーバーの奇襲をやったから、たとえそのスイッチで10万人が死んでも、自分は詫びる気持ちなどない」と言っていたわ。人の命、生き物の命って、一体何なのかしら。その命を簡単に奪う人たちは、命をどう考えているのかしら。何も考えていないのかしら。とても、辛いわ。わたくしは自分が生きることで、沢山の生き物の命を奪っていると思うと、自分が本当に生きる価値があるのか疑問に思ってしまうのです。わたくしはステーキも鶏肉もいただきます。でもそれは動物達の命を奪った結果与えられたものでしょう？そう考えると、とても辛くて……」

「亜希子、僕達の存在は与えられたものだよ。生はプロセスだ。この生が総てじゃない。自分が存在を許されている限り、自分の生存に必要なものの命は奪わざるを得ない。許しを請い、感謝して他の生き物の命を奪うしか生きる方法は無い。それでも奪うことに変わりはない。ジェノサイドの人たちも、口帝疫で動物を沢山殺した人たちも、命の尊さというようなことは意識の念頭に無かったと思うよ。だからそういう無感覚にならないために、常に意識を生起させて、自分自身として生きている必要があると思うんだ。自分という存在はこの世界に存在すること自体で、自己責任が生じているんだ。この世界は写された像の世界だから、心の純粹さと、愛がその基底に無いと歪を生じさせて、その結果、ジェノサイドも平気でやってしまうようになるんだと思う」

「賢、難しい話は後にしよう。先ず、食事を楽しまなくちゃ」

「そうだね、ダディ、ごめんなさい」

梓が父に聞いた。

「お父様、どうして、お医者様になられたのですか？」

「わたしは子供の頃、周りに病気に罹っている人が大勢いる環境で育ったんだ。おじさんは肺がんだったし、母親は糖尿病だったし、姉は子宮内膜症だったし、隣の家にはアルツハイマーの老人が居て、前の家には小児麻痺の子供が居た。2軒離れた向こうの家には、イタイタイ病の患者とその奥さんが白血病を患っていた。それぞれ、病院に通ったり、いろいろな療法を試してみたりしていた。しかし、どの人の病も癒えなかった。一時は改善したように見えても、また直ぐにぶり返したり、病院の治療で返って症状が悪化した人もいた。病気で苦しんでいる人たちを見ていて、こういう人たちを、自分の力で何とか治してあげたいと思ったんだ。それも、先端技術を使った医療で、完全に治してやりたいと。それで英語を勉強して、高校の時にアメリカに渡ったんだ。医者になるのは並大抵の努力じゃなかった。でも、何とか医者になれた。そして、今では、この道を選んでよかったと思っている。しかし、病は医者だけの力ではどうにもならないことが分かってきた。患者自身の力が必要だとわかった。わたしの治療には西洋医学だけじゃなくて、東洋医療の技術も取り込んでいて、精神的な療法なんかも使っている。特に原因の分からない病気にはオステオパシーという方法を使ったりして、患者の自己回復力で直すことも行っているんだ。退行催眠や、自己暗示法を使うこともある。これが手術を行うときに麻薬よりも有効に作用することがあるんだ。まだまだ、人間の体には分からないことが沢山ある。だから、挑戦のし甲斐があるんだ」

食事の手を休めて話し込んでいる父の姿を見て、母が頷いている。母が父を尊敬していることが梓には一目で分かった。

「ああ、すまない、自分の仕事の話になるとつい夢中になってしまって・・・さあ、皆、鳥やエビ、イカのフライも、もっと食べて・・・」

食事が済むと、女性達は片付けを行った。父と賢はグランドピアノの置いてある居間に移動した。父がスタンドバーに行き、コーヒーのセットをした。それから2つのブランディグラスにヘネシーを注いで持って来て、一つを賢に渡した。ふたりはソファに腰掛けた。

「賢、よく来てくれたな。ママは本当に喜んでいるよ。お前が人びとの

意識を改革するプロジェクトに参加していると聞いて、正直そんなことができるのだろうかと思っていたが、こうして実際に世界中の霊的に高いレベルにあると言われている場所を訪れている姿を見ると、その真剣味を感じるよ。しかし、本音を言えばやはり難しいんだろうな？」

「このプロジェクトは極秘だから、詳細はダディにも話せないけど、僕は試行を通してしか、人々の意識に影響を与えるような効果は得られないと思っているんだ。これは感だけどね。だから、実際にそういう霊的に調和して生きている人たちの姿を見てみたかったんだ。その結果を試行に取り入れようとしているんだ」

「そうか、それ以上は話さなくてもいいよ。それで、ここではナバホかホピを調べようと考えているんだな」

「うん、そうなんだ。彼らの生き方を観てみたいんだ」

「そうか、さっき言った私の知り合いを紹介しても良いぞ」

そう言うと父はスタンドバーに戻ってそこにある電話番号簿を繰り、暫くしてソファーに戻って来ると、ニコニコしながら名前と電話番号を書いた紙切れを賢に渡しながら言った。

「賢、彼はいつでも会ってくれると思う。これが電話番号だ。彼の名前はMartwain Gausfawlflyer、現在はインディアン・ジュエリーの店を営んでいる。必要ならお前が自分で電話を掛けてアポイントメントを取ちなさい」

女性達4人ががやがやと話をしながら、リビングルームに入って来た。

「パパ、愛子ちゃんがダンスする。ミュージック、どうぞ、ね」

「まあ、皆、座りなさい。コーヒーでも飲んで、一息入れてから拝見しよう」

父はスタンドバーに行くとコーヒーの支度をした。賢が梓にホピの調査の予定を確認した。梓はすぐに応えた。

「明日はセドナで日本から予約したガイドの知人の家を訪問し、その日はセドナに泊まり、その明後日は、ホピの居住区に行って原住民にコンタクトを取ったらどうでしょうか」

賢は今回は父の友人に会う時間はなさそうなので、次の機会に訪問しよ

うと思った。翌日はガイドにホピの居住地セドナを案内してもらうことにした。梓がガイドに電話を掛けて翌日のピックアップを依頼した。賢と梓が予定を相談している間、愛子と母はダンスの話をしていた。

「愛子さん、バレエのレッスンしている？」

「はい、ママ、でも、まだ習い始めて半年しか経っていません」

父が4人分のコーヒーをトレイに載せて持って来た。コーヒーカップを一つずつ女性達の前に置きながら言った。

「そうか、愛子ちゃんは、バレエを始めたばかりなのか。それじゃあ、まだ曲は無理かな？」

「はい、でも、わたし、音楽に合わせて踊りたいです」

父も母も当然愛子のバレエに期待を寄せる訳はなかった。しかし、他の3人はこの半年間で、愛子のバレエが垢抜けしたのを知っている。コーヒーを一口啜ると、愛子はスタンドバーの隅に行き、ワンピースを脱ぎ水着になった。父は空のトレイを持ってスタンドバーに行き、それを置きながら、愛子に言った。

「どんな曲でダンスしたいの？」

「白鳥の湖がいいです。ビッグパパ、一番踊り易いので」

「OK、白鳥たちの踊りの部分でいいかな、あの有名な部分、あれならピアノで弾けるよ」

「わぁ素敵、白鳥たちの踊りの部分でいいです。お願いします」

父はグランドピアノに向かい、スタンバイした。愛子はソファの前に戻るとポワント(爪先立ち)の態勢をとった。賢と亜希子は愛子がいつ、トシューズを荷物に入れたのか、その執念に感心した。父が愛子のスタンバイのポーズを見て、ピアノを演奏し始めた。美しいピアノの音色が響いた。賢は父のピアノの演奏を久しぶりに聞いてうっとりした。母もその音色に同調するように深く息を吸い込んだ。そして、愛子に目を向けて驚いた。その踊りは優雅で美しかった。母は今まで何度かバレエを見たことがあったが、どの劇場でも、愛子ほど美しい踊りのできる踊り子は居なかった。空中を舞う鳥のように踊り廻る愛子の姿は、全員の視線を捕らえて釘付けにした。母は感動して涙を流した。踊り終わると、

愛子は深く辞儀をした。全員拍手をした。いつまでも拍手していた。

「愛子さん、わたし、素晴らしい孫を持ったわ。あなたのこと、うんと好きになった。わたしの、愛子さん」

母は立ち上がって愛子の所に行くと、軽くハグした。

「ママ、ありがとうございます。皆さん、ありがとうございます。賢パパ、ありがとうございます。そしてビッグパパ、素敵な演奏ありがとうございます」

「愛子ちゃんはまるで、プリマドンナだな。ダンスも挨拶も一流だ」父が感心して言った。皆頷いた。父が賢に向かって言った。

「賢、アフリカでの体験を話してくれないか？」

賢は返事をする前に、梓と亜希子の顔を見た。梓は僅かに頷いたようだった。亜希子は視線を落とした。賢が応えた。

「ダディ、アフリカの体験には2つあるんだけど、一つは過去の経過を説明してからでないとう理解が難しいと思うから、もう一つの体験、ドゴン族の村を訪ねて長老オゴンから聞いた話を少し紹介するよ」

賢はドゴンの神話アンマとノンモの話を、要点を絞って話した。父はドゴンの生き方はアメリカ・インディアンの生き方に通じると言った。

「その生き方は、世界中に分散しているどの古代人の生き様^{さま}にも、共通しているような気がするな。賢、そう思わないか？日本の縄文時代も同じだ。わたしは書籍でアフリカの祈祷用の面を見たことがあるが、縄文時代の面や、土偶の顔によく似ていた。あのデフォルメの技法は、現在の我々の文明からは出て来ない」

「ダディ、その通りだと思うよ」

「そうか、意見が一致したわけだ・・・ところで、愛子はプールで水浴びをしたいと言っていたな」

「はい、ビッグパパ、いま水着だから、そのまま泳いでもいいですか？」

「愛子、お前、泳げたっけ？」

賢がからかった。愛子はまじめに応えた。

「賢パパ、学校の授業で教わったわ。それに、本当は学校では禁止していたけど、友達と何度かこっそり紀ノ川で泳いだこともあるし」

「分かった。気を付けて泳げよ・・・そうだ、僕も一緒に泳ぐよ」
賢はそう言うと、父に向かって水着を貸して欲しいと言った。母が、賢の部屋には水着ばかりでなく、他の衣類なども総て用意してあると言った。賢は急いで階段を駆け上がると自分の部屋で水着に着替え、タオルを2枚持って降りて来た。愛子がトーシューズを脱いで待っていた。ふたりの女性はそのまま賢と愛子の後に附いてプールサイドに出た。プールは長さ15メートル、幅7メートルもあり、個人の家のプールとしては大きい方だった。賢と愛子は体に水を掛けた。プールの水は生温かった。ふたりはいきなりプールに飛び込んだ。ふたりが気持ちよさそうに泳いでいるのを亜希子と梓はじっと見つめていた。暫くして、父と母もプールサイドに現れた。空の星が美しく輝いていた。

翌日、4人は朝食を済ませてから、それぞれがセカンドバッグを持ってガイドが来るのを待った。梓はバッグにカメラを入れて肩から提げている。父と母は

「今日はみんなが出かけた後で病院に通常の勤務に出るが、明日はみんなが帰国するまでには帰宅しているよ」

と言った。ガイドは8時過ぎにワゴン車を運転して来た。ナバホ族の青年だった。目は二重で鼻は高く顔全体に濃い髭を生やしている。肌の色は日本人と変わらない。背丈は賢と同じくらいである。

「Good Morning. Nice to meet you, everybody. My name is Richard Dedjim.」(おはようございます。皆さんはじめまして。わたくしはリチャード・デジムです。)

4人はそれぞれ挨拶を交わし、リチャードと握手をした。賢は父と母をハグし、別れを告げた。母はうっすら涙を浮かべた。3人の女性は賢の両親にそれぞれ感謝の言葉を述べ、何度も頭を下げた。リチャードは全員車に乗り込むと、直ぐに出発した。賢は見るもの総てを懐かしく感じた。片道5車線もある北ブラックキャニオン・フリーウェイを飛ばしてゆくと、工場地帯を通り過ぎた辺りから次第に建物が消え、サボテンや灌木の目立つ荒野に変わった。そこは賢がいつもボーリング(つまらない)と思っていたところだが、今こうして車窓から眺めていると、その

単調な景色に何とも言えぬ郷愁を覚えるのだった。無限に続くのかと思われる白っぽい砂漠の遠方に山々が現れてきて、茶色の砂岩の岩肌が、次第に近づいてきて、またゆっくり遠ざかってゆく。左手にいくつものメサの大地が続く。北上するに従って土地の高度が上がるためか、周りの植物も背丈が低くなってゆく。やがてサボテンはほとんど無くなり、針葉樹などの山岳に見られる木々が現れてきた。フリーウェイはいつしか、片道2車線のハイウェイのような曲がりくねった山道になってきた。賢は車の窓を少し開けてみた。外の空気が流れ込み、室内のクーラーの冷氣と入れ替わるかのように爽快に感じられた。スコッツデールのあの熱気もいつしか消えていた。セドナの辺りではもうひんやり冷たい空気が素肌に当る。リチャードは無口だった。賢たちもほとんど会話をしなかった。4人とも時差で眠気を覚えていた。時々愛子が「ここはどこ？」などと寝ぼけ眼で賢に訊いていた。フェニックスからフリーウェイを飛ばしておよそ3時間でセドナの街に着いた。このあたりはオアシスの感じがする。かつてはアメリカ・インディアンであるホピ族の生活の場所だった地域だ。今では、パワースポットと呼ばれ、富裕な人たちの憩いの場所になってしまっている。賢は子供の頃よく、このあたりで遊んだ記憶がある。沢で水遊びをしたり、森で虫取りをしたりした。そこには豊かな自然があり、静けさと、暖かさが同居していた。賢は岩に支えられ、土に抱かれて遊んだ。リチャードがホピ族の友人宅に4人を連れて行ったのは、スコッツデールを出て丁度3時間が経過した頃だった。3人の女性達はリチャードの

「We arrived now.」(さてついたよ)

という声で冷えた空気を深く吸い込みながら目を覚ました。リチャードは4人に附いてくるよう促して、岩窟の中に造られたインディアン・ジュエリー・ショップに入って行った。内壁の至るところに魔よけのオーナメント(壁飾り)が吊してあり、岩面に掘ったニッチ(壁龕)には鮮やかな色彩のカチナ・ドールが並べられている。そのターキッシュ・ブルーを基調とし、赤や黄色の装飾を施したカチナ・ドールは3人の女性達の心を惹き付けた。賢はその人形と、奥の壁の上方高くに飾られてい

るA1大のカチナ・ダンスの写真をしているうちに、それがアフリカのドゴン族を訪問したときに見せてもらった仮面ダンスに似ていると感じてきた。リチャードは店の奥まで突き進むと、そこに設けられているレッドウッドの扉をノックした。扉が内側に開かれて、一人の顔に深い皺の刻まれた老人が姿を現した。

「Hello, Elder Martwain Gausfawlflyer. How are you sir?」（こんにちは、長老マートゥエイン・ガウスファウルフライヤーさん、ご機嫌いかがでいらっしゃいますか？）

賢は、ハッとして父からももらった知人のメモを観た。将にその人だった。

「これは一体どうしたことだろう」

賢は自問した。

「Hello, Richard. It's good day today. Welcome to a Hopi house, the prophesied persons.」（こんにちは、リチャード。今日は良い日だ。ようこそホピの家に、予言されたみなさん）

「What would you say sir?」（なんとおっしゃいました？）

「I have been burning for the moment to meet these persons for a long time.」（わたしは長い間こちらの方々にお会いできる瞬間を待ち焦がれていました。）

賢は、この長老が自分達のことを言っていることを知ると、丁重に挨拶し、長老と握手を交わした。梓も賢に習って同じように挨拶を交わした。亜希子と愛子はどうしたらよいのか躊躇しているようだった。長老が亜希子に近づくと丁寧に頭を下げて言った。

「Welcome to the gate of heaven, my mother. I have been keeping the invocation room on the promised mesa.」（わが母上、ようこそ天国の門にいらっしゃいました。わたしは約束の台地に祈りの部屋を用意しておきました。）

リチャードは驚いている。亜希子も呆然としていた。賢が言った。

「Would you expect for our visit here?」（我々の訪問を予想されていたのですか？）

「Yes, we were informed it from the God long-long time ago. It is that the

persons who connect this world to the next world as the physical and the spiritual plane could have to visit here just before the world changes. I dreamed it last night again.」(はい、わたし達は神からこのことをずっとずっと以前に伝えられました。それは、“世界が変化する直前に、物理的かつ精神的次元において、この世界を次の世界に繋げる人たちがここを訪れる”ということです。わたしは昨夜、再びその夢を見たのです。) ドアのところで立ち話をしていることに少し懸念したためか、リチャードが長老に言った。

「Thank you very much for your reception. Anyway, could you allow us getting in your house?」(歓待ありがとうございます。兎に角、家に入れて頂けますか?)

「Oh, I' m very sorry. I was too glad to invite you in my house.」(これは、大変失礼いたしました。あまりに嬉しかったので、あなた方を家にお招きすることも忘れてしまって)

長老の背後に妻と思しき女性が居ることに、5人は初めて気が附いた。長老の妻は穏やかに5人に向かって頭を下げた。5人も丁寧に辞儀をした。長老が妻に向かって軽く頷いた。妻はそそくさとその場を辞すと奥の部屋に入って行った。長老は5人を部屋の奥に案内した。賢は、長老に近づくとそっと話しかけた。

「Elder, possibly you might be the friend of my father?」(長老、もしかして、私の父の友達でいらっしゃいますか?)

「Naturally, your father has been my friend for some time. I thank your father taking care of me.」(そうですよ。あなたのお父さんにはずっと以前から、お世話になっています)

「He introduced me Elder last night. However, I thought we couldn't have enough time to visit you. So, I refrained to contact with you, Elder. 」(昨晚、父から長老のことを紹介してもらったのですが、今回はスケジュールの関係で、連絡させてもらうのを控えていました)

「I called this gentleman to ask if I could guide you.」(わたしの方から、この人に連絡して、皆さんの案内をさせて欲しいと申し出たのですよ)

長老はリチャードの方を振り向いて言った。

奥の部屋は洞窟内の部屋だけあって、天井はあまり高くなかったが、周囲の壁に沿って段差が作っており、そこに手織りのようなワインレッドの敷物が敷かれていた。長老は5人にその敷物の上に腰掛けるように案内した。5人は長手の壁に沿って1列に腰掛けた。長老はその壁と直角になった狭い方の壁面に背を向けて腰掛けた。床にはブルーの絨毯が敷かれている。妻が茶を注いだカップを7個トレイに載せて持って来て、全員の手前の床の上に並べた。長老が全員に茶を勧めた。妻が頷いた。リチャードが言った。

「Thank you so much. May I ask something?」（ありがとうございます。お聴きしたいがありますが）

「Please ask me anything. I'll answer them as long as I can.」（何なりと質問してください。出来る限り答えます）

「Could you explain the vision you would have dreamed last night?」（昨夜見られた夢について説明して頂けませんか？）

「Yes, my pleasure. It was completely the same story as the God informed our tribe about our future. It is that four persons will visit this area to open the gate to the next world. Four persons are young and will come from a foreign country. They are one gentleman and three ladies. He will build the base of the new world. He must be our father of the future. He is the person born here. One lady will make the spiritual gate to the heaven. She is our mother of the future. One lady will help the gentleman to achieve the important task. She will be the wife of gentleman. She will be a contemporary person who will typify this world. One lady will make a new world ideal life model. However, another one lady will be missing at this moment. She will help people all the world to prepare moving into the new world. She will be respected by everyone as the Goddess.」（はい、喜んで。それは神が未来について我々の種族に伝えた内容と全く同じです。この地域に次の世界への入り口を開けるために、海外から4人の方々が訪れるというものです。4人は若く、海外から来ます。一人の紳士と3人の

淑女です。紳士は新しい世界の基礎を築きます。彼は我々の未来の父の
はずです。この地で生まれた方です。一人の淑女は天国への精神的な門
を開けます。彼女は我々の未来の母です。一人の淑女は紳士が重要な仕
事を達成するのを助けます。彼女は紳士の妻です。彼女は这个世界のモ
デルとなる現代的な人です。一人の淑女は新しい世界の理想的な生活の
モデルを作ります。しかし、現在は一人の淑女が居ません。彼女は世界
中の人々が新しい世界に移る準備をするのを助けます。彼女は総ての人
々から女神と崇められます)

長老が一呼吸置くと、妻が全員に茶を勧めた。皆、コップを手に取り、
茶を口にした。ハーブティだった。長老が続けた。

「We have the Prophets of the future. It is the Revelation for us about the
way to live. We take the teaching to all the Sacred Colors of Humanity that
we are all children of the mother earth and the father sky, and came from a
divine ancestry or holy ancestors. As these different seeds live closely and
help one another so that we must live in harmony as one family named
Human. We are not so different in the Creators eyes and when we all know
and remember our roots, many illusions of our manufactured society will be
dispelled. This world is the third world. We had preceding two worlds
which had overthrown long years ago. When this world was begun, the first
human has brought one gourd which a swastika icon and sun icon printed
on. These icons suggest Japan. Most people have forgotten this Prophets.
Therefore, we have to transfer it to the persons who received the Oracle.
They are you, Mr. Uchimi, Miss Fujishiro, Miss Tanabe and Miss Aiko
Uchimi. I believe you could have potential superior power like clairvoyance
or teleportation and etc. There are some extreme electromagnetic spots
named the vortex in Sedona area. I promise you that your latent capabilities
will be awaken by standing on there。」 (我々は予言を受けています。そ
れは我々の生きるべき道を示す啓示です。われわれはこの教えを聖なる
人類の有色人種に伝えます。我々は母なる地球、父なる空の子供達であ
り、天国の祖先あるいは聖なる祖先からもたらされました。これらの異

なった種と一緒に生き、助け合っているように、我々も人類という一つの家族として調和して生きなくてはなりません。創造者の目には我々は異なった人種には見えません。だから、我々が自分達の元を知り、思い出せば、我々の作り出したこの社会の幻影は消えてしまうでしょう。この世界は3番目の世界です。これよりずっと以前に既に滅んでしまった2つの世界がありました。この世界が始まったとき、初めの人間が卍と太陽の印が描かれている瓢箪を持ってきました。それらの印は日本を暗示しています。ほとんどの人々はこの予言を忘れ去っています。だから、我々はこのことを神託を受けた人たちに伝えなくてはならないのです。その人たちとは内観さん、藤代さん、田辺さん、内観愛子さん、あなた方のことです。わたしはそう確信しています。わたしはあなた方が透視や遠隔移動などの超能力をお持ちだと信じています。セドナ地域にはいくつかのボルテックスと呼ばれる超電磁力のスポットがあります。わたしはあなた方がそこに立つことで、必ず透視やテレポーションのような潜在的能力を目覚めさせるということを確信しています)

リチャードはビックリしていた。まさか自分が案内してきた者たちが、そのような人間だとは考えてもみなかった。賢の顔をじっと見つめて、ボーっとしている。賢が言った。

「I could not believe that Prophet, because we are just ordinary people. We did not receive any special message from the Heaven like the Oracle. These three ladies are not those people you mentioned too.」(わたくしはそんな予言は信じることができません。なぜなら、我々は普通の人間だからです。我々は神託のような特別のメッセージを天から授かってなどいません。ここの3人の女性もあなたがおっしゃったような人たちではありません)

3人の女性達は一斉に頷いた。賢は愛子が英語を理解しているのを嬉しく思った。そして愛子に向かって言った。

「愛子、英語分かるか？」

「うん、賢パパ、なんとなく理解できているみたい」

「そうか、それは良かった」

長老は微笑みながら言った。

「That's right. You couldn't understand yourselves now. However, it is true. You would respond to yourselves soon as the real existence. I will take you to these power spots later on. I'm sure you would recognize yourselves.」(その通りです。今はあなたがたは自分達自身に附いてお分りにならないでしょう。しかし、真実なのです。あなた方は直ぐに実態としてのあなた方自身に呼応されることでしょう。わたしは後ほど、あなた方をそれらのパワースポットにお連れします。きっとあなた方はご自分のことを認識されることでしょう)

それから、賢は長老にホビ族の生活や、精神的な活動について質問した。長老からの回答は既に賢の知っている内容だった。自然と一体になって生きていること、現代の科学技術がもたらした、人間の意識を無視したシステムへの批判、このまま突き進んだ時にいずれ突き当たる大きな壁のこと、これらは全て賢の考えている通りの内容だった。5人は長老に案内されてボルテックスのスポットを訪れることにした。セドナにはそのような場所が沢山あると長老は説明した。車を走らせながらリチャードが、自分の車の説明をしている。山の中を進むためには4輪独立駆動の車じゃなくてはならないと力説している。4人はリチャードを称えるように「Yes、Yes」頷きながら、外の景色を眺めていた。先ず、エアポート・メサに行った。セドナの空港近くだ。特に困難な場所でもなく、車を停めてから少し歩くと、セドナの全景が見渡せる場所に出た。4人はその場所に立ってセドナの大自然のパノラマに見とれていた。すると愛子がそこできると回転し始めた。どうやら、ダンスを始めたようだ。皆、愛子が喜び、浮かれていると思っていた。しかし、何時までも回っているので、賢が近づいて聞いた。

「愛子、どうした、そんなに浮かれてよほど気分が良いのか？」

回転しながら、愛子が言った。

「賢パパ、止まらないの。体が自然に回転してしまうのよ。ねえ、止めて！」

賢が愛子の手を取って止めようとする、愛子はまるで紐がまつわりつ

くかのように賢の体に抱きついた。賢もその勢いで、半周ほど回転して止まった。

「どうしたんだ？」

「変なのよ、踊りたくなってきたら、自然に体が回転し始めたの」
長老がそれを見て微笑んでいる。その場はそれで収まった。梓が言った。「リーダー、わたくし、目が可笑しいんです。物が小さく見えるんです。とっても、あの景色もどんどん遠くに遠ざかってゆくようなんです。わたくし怖くて」

賢は右手で愛子の手を握りながら、梓の目の前に左手の人差し指を立てて言った。

「梓、この指をじっと見るんだ。そう、じっといいか、僕がこの指をゆっくり遠ざけてゆくから、そのまま見続けているよ……」

「あっ、リーダー、直りました。不思議ですね」

長老はニコニコしながら、賢たちの行動を見つめている。リチャードも真似をして指を凝視し、それを次第に遠ざけてみて首をかしげている。賢は可笑しくなった。一行は30分ほどその場に居た。賢は自分の体が軽く感じられた。しかし、賢と亜希子には特別の現象は起きなかった。そこから、一行は一旦セドナの町に戻ることにした。リチャードは街にある日本食も扱っているレストランに車を着けた。久しぶりの日本食に4人は期待の胸を膨らませたが、注文した寿司はいずれも、魚が生臭く、シャリは水っぽかった。それでも、久しぶりの寿司の形に4人とも満足した。長老も同席したが、寿司は食わず、野菜のスープとピキという紙のように薄いパンを食べただけだった。リチャードは寿司を珍しそうに食べていた。食事を済ますとまた車に戻り、89A号線を経て179号線に入り、オーク・クリークに沿って南下した。途中でChapel Of The Holy Cross（聖なる十字架の協会）と案内の或る方向に左折すると、リチャードは先の駐車場に車を停めた。全員、車を降りて少し歩くと崖の岩壁面を使って巧妙に建てた教会の前に出た。そこから更に暫く歩いてレッドロックを見渡せる丘に出た。リチャードに言われて4人は丘の上からマドンナ・アンド・チャイルド（マドンナと子供）という赤い砂岩

の岩を眺めた。嬰兒のイエスを抱いていたマリアに似ている岩だとリチャードが説明した。長老はそんな名前は無関係ないといわんばかりに、その丘からレッドロック全体を眺めるように賢たちに言った。4人は暫くの間じっと見つめていたが、梓がまた、「岩が小さくなってゆく」と言い出した。今度は指を何度翳しても、なかなか感覚は元に戻らなかった。賢は梓に暫く瞑目するように言った。そして近くを見ながらゆっくり目を開けるように言った。それで、梓の視覚はやっと正常に戻った。そこから再び117号線に戻り、再び南下してベル・ロックに向かった。ここはセドナでもかなり強力なボルテックスがある場所だと長老が言った。大勢の人が変容を経験していると言った。一行は胸躍る心地がしてきた。あまり起伏の険しくない赤い砂岩の道を5人は長老に附いてゆっくり進んだ。賢は自分の体が、自分のものでないような妙な感覚に捕らわれてきた。ボルテックスポイントに着くと、トレイルの入り口に右周りとは左周りの矢印がある。しかし、長老はそのいずれのトレイルも進まずトレイルから外れた、道らしい道もない山肌を突き進んだ。5人は歩きにくかったが必死に長老に附いて行った。長老が少し大きめの、その場所には似つかわしくない、赤黒い直径5メートルもある岩をよじ登るようにして越え、その岩の向こう側に渡った。賢は3人の女性達の後に附いて最後尾を進んだ。まだ、女性達が必死になって岩をよじ登っている。賢は体が次第に軽くなり、岩を越えようとしたときは、もうほとんど自分の重さが意識できなくなっていた。それでも、女性達の後から「よいしょ」と一声掛けて岩に登ろうと右足で土を蹴ったとき、急に体がフワッと浮いたと思ったら、瞬間的に長老の前に来ていた。長老が驚いたように言った。

「You could control the gravity on your body, couldn't you.」(自分に掛かる重力を制御できるんですね)

「I hope so. But I'm not sure whether it's controllable or not.」(そうならいいですが。しかし、制御できるのかどうか分かりません)

「It becomes possible after you would have gotten the gravity-free body.」(重力から開放された肉体を獲得してしまえば、そのあとできるようになり

ますよ)

長老が言った。賢は意識を自分の肉体に向け、肉体が空中に浮く状態をビジョン化してみた。体が50センチほど空中に浮き上がった。リチャードはビックリして尻餅を突いてしまった。賢は更に上昇することを意識した。体は岩の上空3メートルほどのあたりに浮き上がった。幸い風は無い。亜希子と梓は口をぽかんと開けている。愛子は暫し目をぱちくりしていたが、急に笑顔になって、両掌を打ち鳴らして喜んだ。

「賢パパ、すごーい、すごーい！」

長老は静かに頷いた。

「Now, you could recognize yourself.」(今、あなたは自分自身を認識できます)

賢は自分が地上に静かに降りて来ることをビジョン化した。体が静かに下降し、地上に着地すると次第に重たくなってきた。賢は周囲の空間全体に自分の意識が拡大していることに気付いた。意識が急速に眉間に集中してくるのを感じていた。静かに目を閉じ再び開けた。見た目にはあたりの景色に何の変化も感じられない。自分が肉体に掛かる重力を制御できるということがまだ信じられなかった。しかし、それは重力を制御するというより、重力が自分と関係無くなったと言ったほうがふさわしい状態だった。自分からは地球や重力に対して何の働き掛けもしなかった。只、上昇しよう、下降しようと思っただけだった。そのとき、亜希子が言った。

「あなた、わたくしの手を握っててください。ああ、自分が消えてしまいそうです。どうしましょう」

賢は亜希子の近くに駆け寄って、その右手を握った。

「亜希子駄目だ、君が僕の手を握りなさい。絶対離さないようにいいね」
亜希子の体が足の部分から次第に消えてゆく、梓と愛子は両手で自分の顔を押しえた。誰もどうすることもできない。賢が叫んだ。

「亜希子、絶対手を離すなよ。いいな」

微かに亜希子の声が聞こえてきた。

「はい、あなた、どうしま・・・」

亜希子の体は完全に消えてしまった。リチャードはまるで腰が抜けてしまったかのように、両手で這いずって逃げ出すように岩の上を草むらのほうに向かって移動していた。賢は右手に亜希子の存在を感じてはいたが、それは肉体的な感覚ではなかった。長老が言った。

「Mr.Uchimi, you could pull-back her. Now, pull her back as strong as you can!」（内観さん、あなたは彼女を引き戻せます。さあ、思い切り彼女を引っ張って！）

賢は意識を集中して、亜希子を可視化した。亜希子の姿が歪みながらエネルギーの渦の中に引き込まれそうになっているのが見えた。亜希子は必死に賢の手を握っている。賢はその亜希子の手を両手で掴むと、思い切り自分の方に引っ張った。自分も亜希子が呑み込まれそうになっているエネルギーの渦の中に、引き込まれそうになった。しかし、思い切り意志力を働かせてそのエネルギーに立ち向かった。亜希子を思い切り引っ張っていると、やがて渦の回転が少し弱まったかのように感じられ、それと同時に亜希子を自分の腕の中に引き戻すことができた。亜希子は賢の胸に抱きついた。自分の体が吸い込まれないように思い切り賢を抱きしめた。梓と愛子は、賢の両腕に抱かれた亜希子の姿が次第にはっきりしてくるのをじっと見つめていた。亜希子は涙を流している。賢が言った。

「ここは危険だ。違う次元のエネルギーが渦巻いている。その渦に巻き込まれてしまったら存在が確定できなくなる。早く、ここから遠ざかったほうがいい」

亜希子は賢の腕の中で目に一杯涙を溜め、震えながら頷いた。賢は長老に向かって言った。

「I recognized the uncontrollable energy vortex here. The energy flow is too strong for us to cultivate our subtle body. We had better to quit this area as soon as possible. How would you think?」（わたくしはここに制御できないエネルギーの渦があるのを知りました。我々には、精妙な体をより高めるには、エネルギーの流れが少し強過ぎるようになります。我々はできるだけ早く、この領域から出たほうがいいと思います。どう思われますか）

すか?)

「I agree with you. Let's get out here soon.」(そうですね。直ぐにここを出しましょう)

長老は巫希子が消えかけた黒っぽい大岩を避けるようにして、元来た道に戻った。賢たちも後に続いた。梓が言った。

「リーダー、あの10メートルほどもあるレッド・ロックを人が這い上がっています。歯を食いしばっています。だけど危険ですね、危ない！」賢には梓の指差したレッド・ロックが景色の中の一部にしか見えなかった。

「あのひと、危ない、ほら、2度も足を踏み外してます。レッド・ロックは滑るのですね」

賢は梓が遠くのを拡大視できることを知った。梓以外の4人にはレッド・ロック自体が小指ほどにしか見えない。梓は岩面を這い上がっている人間の表情まで読み取れることが分かった。

「梓、遠視ができてみたいだな。本当にそんなに細かいところまで見えるのか？」

「はいリーダー、自分でも不思議な感覚です。細かい部分まで見えます。見えるというより、分かると言ったほうが・・・いいえ、やはり、見えます」

車に戻るとリチャードは落ち着かない様子で、運転席周りをチェックし、エンジンを掛けてふかしてみたりしている。賢が聞いた。

「Anything wrong, Richard?」(何処か故障か、リチャード?)

「Not at all. I'm scared of the influence of vortex on my car.」(全然。車への渦の影響が心配なんだ)

「Never mind. I think those energy vortexes are phenomena in the fourth dimension field.」(心配要らないよ。ああいうエネルギーの渦は四次元界の現象だと思うよ)

「Okay, we shall go to the next spot.」(分かった、次のスポットに行こう)一行はキャセドラル・ロック(大伽藍岩)と呼ばれるスポットに移動することにした。リチャードは179号線に戻ると、元来た道に戻り始

め、まもなく左に入る脇道に入った。そこがキャセドラル・ロックのトレイルに通じている道路らしい。先ほどベルロックに来るときは4人は気付かなかったが、キャセドラル・ロックはベル・ロックの近くにあることが分かった。ここをゆっくり体験する時間は無い。レッドロッククロッシングという公園まで行き、そこに車を停めた。何組かのツアー客があり、その中に日本人のツアーグループもあった。写真で何度も見たことのあるレッド・ロックの見える川べりに出ると賢が言った。

「ここは僕の故郷だ。僕が子供の頃によく来たところだ。This is my home land. When I was young, I used to visit here frequently. I have many Hopi friends. But I cannot contact with them now. I do not know where they are now.」(・・・ホピの友達が沢山居るんだ。だけど、今は彼らと連絡が取れない。彼らが今、どこに居るのか分からない)
長老が頷いて言った。

「You are our company. We have been waiting for you, Ken.」(あなたは我々の仲間だ。我々はあなたをずっと待っていたよ、賢)
遠くに見えるレッド・ロックと手前を流れている川は自然を象徴するかのように見事に調和した姿を一行に示してくれた。梓と愛子はツアー客の集まっている方に向かって歩いていった。リチャードもその後を追った。賢は長老に尋ねた。

「Why would you know my first name?」(どうして、僕の名前をご存知なのですか?)

「I remember you and your master Mr.Viryukananda. He taught you the nature here so often. How is he?」(わたしはあなたとあなたの師匠のヴィリユーカーナダさんを覚えています。彼は何度もここであなたに自然を教えました。彼はどうしていますか?)

賢は一呼吸置いた。そして、長老に師が最近この世を去ったことを伝えた。長老は悲しそうな顔をした。そして、少し微笑んで言った。

「What did he say to you about the Oracle you' d received?」(彼はあなたにあなたの受け取った神託について何て言いましたか?)

「I' m not sure I have already received it or not. However he told me that I

will become capable to handle this world like mighty God as if a projected optical vision from real substance can be handled by controlling the projector machine. For this world, it' s on the way to the fifth stage, and human race is under the situation to recognize its primary substance.」(それを既に受け取っているのかどうか僕には分かりません。しかし、彼が僕がこの世界を全能の神のように、まるで光の映像をプロジェクターを制御することで操作できるかのように、扱えるようになるだろうと言いました。この世界に附いては、第五段階への途上にあるとのこと。人類は自分達の真の実態を認識する段階にあると言っていました。)

長老は難しい顔をして賢を見つめていた。そして言った。

「Now I could understand the meaning of the Prophets completely. I appreciate the God.」(いま、予言の意味が完全に理解できました。神に感謝します)

長老の目が心なしか潤んでいるように賢には思えた。賢は長老と共に梓たちのいる川岸の辺まで歩いて行った。亜希子の姿が見えない。賢はもう一度あたりを見回した。しかし何処にも亜希子の姿は無かった。景色を眺め、それを堪能していた梓と愛子も、亜希子が居ないことに気付いたようだった。

「賢パパ、亜希子さん、賢パパと一緒にじゃなかったの？」

「さっきまで、近くに居ると思っていたが、ふと気付いたら、居なくなっていた。少し意識を切り替えてみるよ」

賢は瞑目して亜希子を追ってみた。あちこちに渦になった光が見える。その渦の位置が確定しないようにぶれる。遠方は霞んだようになっていて、この領域の向こう側がどうなっているのか皆目見当もつかない。賢は自分の意識がこの次元を完全には把握できていないのかもしれないと思った。亜希子の姿はどこにも見えなかった。光の渦に飲み込まれてしまったのかもしれないと思ったが、それらの渦は賢の意識では捉えにくく、渦の近くに亜希子の意識の流れは感じられない。賢は自分の意識を現界に戻した。長老が近づいて来た。

「What happened?」(どうしたんですか?)